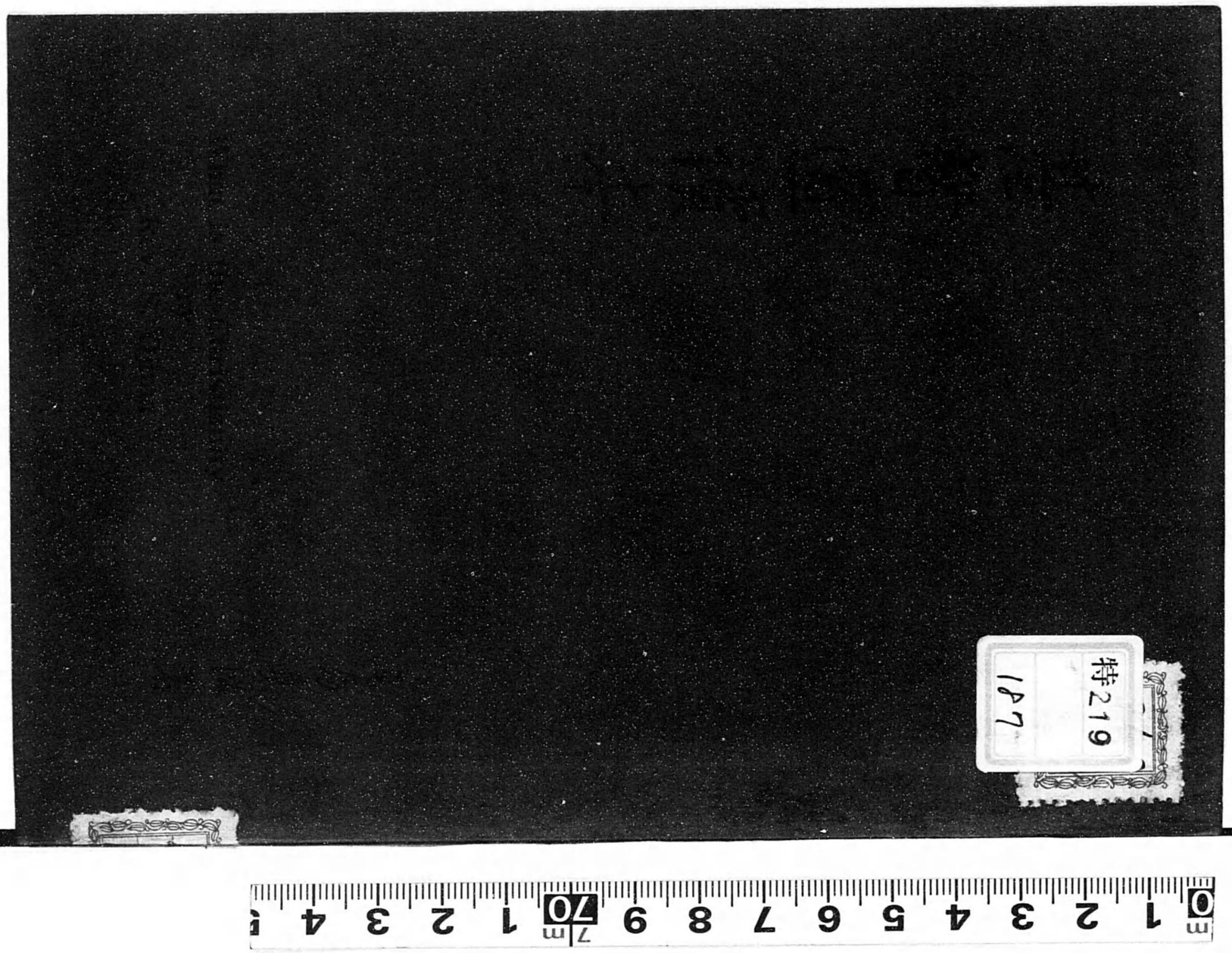

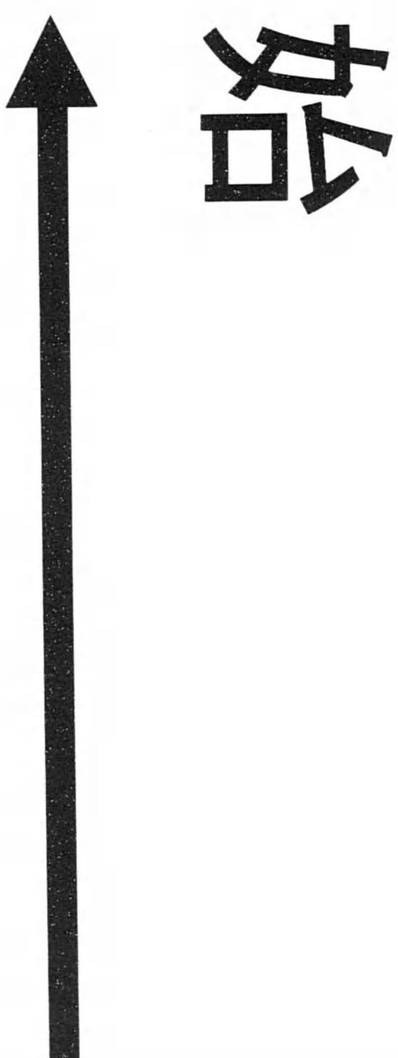

特219
187

基督道讀本

What is the Christianity

BY

Rev. S. Ojima

尾島真治著

特219
187

基督道讀本

尾島眞治著

信賴舍

昭和一 文化學園 文庫

はしがき

私は、昨年の末に、「新創造の神學」と云ふ本を書きました。今迄私の書いた本のいくつかは、六ケ敷〳〵と云はれ通したのだ。今度こしらへた此の本は、去年から、こしらへやうと思ひ、今年の六月までには、こしらへられやうと、友達に約束した。これだけの小本をこしらへるのに、半年も何故かゝるか。私には、六ケしい本なら、早くかけるが、六ケしくない本は、こしらへるのに六ケしいのだ。殊に私のやうな六ケしいこと計書いてきた人には、それが六ケしいのだ。いいえ、私でも、昔は小説も書いて、地方新聞の新年附錄には、度々のせて貰つた事はありますから、分りやすく書かうと思へば

書けるのだ、近くは、幼稚園々兒に六百回以上も話をしたのだ。何、出來ないことはない、いくら私には、それが六ケしくともやる。又私は歌よみの先生であり、神道の學者であるから、かなり、日本語は知つてゐる。だから、分りやすく云ふことは知つてゐる。だが、分りやすくても、意味のないのなら、そこらにざらにある、所謂平民向のお説教師のやるやうなもので、卽ち言葉も意味も淺いのでは宜くはない、言葉は淺く意味は深くすること、此れが、私には十字架だ。だから長くかかつてもやる。友は之を聞いて、私がまだ訪問して、御坐敷へすわつた計りだのに、「先生どうぞ、御丈夫でゐてくださへ」と、へんな時に、萬歲を云はれたのだ、併し友は、大衆への傳道に、いかに熱心であるかを、又基督樣へ、又日本國民へ、いかに深き愛を持つてゐるかを現はしたのだ。又昔女子青年會の主事をして、今は或實業家の夫人となつてゐる方にも、此の本をこしらへる事を話したら、眼の色を變へて賛成された。其の他、誰でも、「それは宜いことだ」と、聲を高めて賛成された。人の賛成計ではない、私も幾年か、隨分長い間、「主イエスよ、三千萬の日本人を、基督者になし給へ、かくして、日本は、世界の爲になりますし、天地と共に邦も榮えます、アーメン」。と祈つてきたのだ、祈つてゐるのだ、大聲俚耳卽ち大きい六ケしい言葉は、學問のない人の耳に這入らないのでは、此のお祈りは、空念佛と同じ相場しかないのだ。

「言葉は淺く、意味は深く」でなくてはならないと云へば、學問のない人には、長いことは禁物だが、六ケしいことを分りやすくするには、どうしても長くなる、これは已むをえない事だ。だが分りやすくするのに專らであるから、長くなるのは許して貰ひたい。此の外に、學問のない人には、矢張分

らないかも知れない、併し考へて讀んでくれるならば、遂には分るのだ。言葉も意味も淺いので、いくら多勢の人が讀んでも、日本の爲にも、世界の爲にもならないのではないか。「いろは」の讀める人が、之を讀んで、能く分れば、日本や外國の神學校（牧師を出す所）の先生と餘り異ならない悟りが開かれる。キリスト樣につきての學問になる。いんえ、いんえ、此の本は、こしらへるのに骨が折れただけ、又世界の沒落した神まなびの人達の決して知ってゐない學問になる。キリスト樣と其の直弟子達の教の儘が分つて、信仰されるのだ。これさへあれば、大學者と同じの物知りになれる。田舍の牧師のない會では、之を年中繰返して讀めば、りつぱな禮拜も出來る。刑務所に這入つてゐる人に差入れれば、獄の中でも禮拜が出來る。此の本を讀んで、私の云ふことが虛言でなく、本當に六ケしい事を分りやすく分らせる本だと思つたら、成たけ多くの人に配つてくださへ。宣教師の人達は、お金もあり、閑もあるのだから、名所見物をするよりも、活動や芝居やを見るよりも、毎日、此の本を少し宛でも、世間にくばると宜しい。くだらない、又間違の多いトラクト（小本）を配達するのは、益が少くて、害が多い、朋友や親類やの救を祈つてゐる計りで、道の本もやらずに居ては、「神を試る」罪を犯すことになるのだ。神樣が自分らの働なしに、働いてくださるかどうかと神試をやるのは、宜くない。此の本は、成るべく價を安くしてあるから、又多く纏まつて買入れる方には割引もしてあるから、一億の日本人、誰にでも一度は是非讀ませる樣に働いてくださへ。朝鮮又は臺灣の人達も、此の本なら、假名をたよつて讀めば、分るのだから、其の人達へも、本當のキリスト道を分らせてくださへ、其の筋では、からだのくらしの安くなる樣に計り、又は

肉の爲の恩給を與へてゐるなら、此の本は心のくらしの安くなること（心の生活安定）卽ち心の爲の恩給を與へるのだ。之に示した基督なしに、人も邦も救はれないのだ。「主イエスよ、願くは、此の小さい本を通して、此の日の本の民の多くを救に導き給へ」と祈りつつ、此の本を皆樣に獻ぐるのである。

昭和十一年三月二十八日
寒波去りて、春の日のうら安の國を照らし始めし朝に

尾島眞治

基督道讀本

目次

はしがき……一
第一章　私共の信じてよい神は何か……一
第二章　基督樣はどんな御方か……八
上……八
中……一四

下……二三
第三章
人……二七
第四章
基督信者の守るべき心得と御行儀と
上……四〇
下……四〇
第五章
悔改と信仰と……五三
第六章
祈禱……六六
上……七九
下……七九
第七章
聖書……八六
第八章
基督様へ忠義を盡す爲の仕方……九五
上、禮典を恭しく守りて……一〇五
中、會を愛して……一〇五
下、邦を愛して……一一六

第九章　未來の事は、何んなに考へたら宜しいか……一三〇
上……一三〇
下……一四五

基督道讀本

第一章

私共の信じてよい神は何か

信仰は人間の天性ですから、何か拜むものが入用です。宗門を嫌つたフランスのコムトと云ふ人は、神を拜まないで、自分の妻君を神の代りに拜んで、人類教を組織しました。ミルと云ふ學者は、始は宗門を拒みましたが、終りは神のあることを云ひ張りました。或人は、山の中に這入つて、神樣、あなたがあるかないか分りませんが、あるなら、あると知らせてくださいと祈

つて、遂に神を信じたさうです。北海道のお婆さんは、こんな大きな昆布が海に毎年出來るが、之は自然に出來るものではない。之は之をつくる神樣があるに違ひない、と思つて、神樣に感謝の祈禱をしてゐたさうです。さうかと云つて、神樣でありさへすれば、何でも宜しと云ふ譯にはゆかない。鰯の頭も信心からから、後光がさすとは、云つてゐられない。分けのぼるふもとの道は異なれど、同じ高峯の月を見るかなと云ふのは、なまけ者の云ひ草です。四百二三十も新らしく起つた宗門は、人間の必要に應じて、宗門商賣人が造つたもので、時間と金錢とを損をさせられる道具です。

神々の信仰。人だの、日だの、月だの、星だの、けものだの、器ものだのに、其の中に靈があると思つて信心しますが、これは宗門の赤です。社會主義を、世間では赤と云ひます。社會主義の多くは、神を信ぜず、物につきて考へます。物質萬能者です、神々の信者は、眞の神は信ぜず、神樣の造つた人だの毛物だのを信ずるのだから、社會主義の樣に、赤と云つてもよろしいのだ。

佛の信仰。佛教は、無神論であり、又有神論であり、更に又無神論であるから、いつでも、どこでも、御出あそばす神は信ぜず、學問のない人達の爲に、無神論では、宗門に似合はないので、神々として、阿彌陀とか、大日とか、藥師とか、觀音とか、えらい坊さん達が、愚かな男や女やの爲に歌人が歌を詠む樣に詠み出したものである。たとへ、それで安心が得られたり、宗門の惠をうけられたからとて、それは、賴にならない者である。

基督道でも、舊教では、キリスト樣の母マリヤや、聖人達やを拜んでゐるが、之は他の宗門の神々と同じものです。又天の父樣、又聖靈樣と云つて、

基督道の父と子と聖靈との三位一體卽ち一の生命に、三のたましいのあるひとりの神を信ずるのに、舊教は三の神々を信じたり、又は人間を神として拜んだりしてゐるのは間違である。

新教の人達でも、天の父、聖靈樣と云ふて、祈りつづけて居るが、之は天の父も肉と血とを以て此の世に來らず、聖靈も肉と血とを以て此の世に來らず。只信ずる人々の心の上にありと思つて、信じてゐるのです。有ると云ふ論據は、不十分です。證據の十分な神樣は、人間の世に、神の實錄となつて、現はれた御方でなければならない。神であり乍ら人であり、人であり乍ら神である御方でなければならない。さうでなければ、夢の樣な話で、たのみにならない。日本の言葉に、現神とか、現人神とか、卽ち人の形に現はれた神とか申しますが、それが入用であり、信ずべき神樣です。その外の神信心は迷です。

さう云ふ神樣は、物でないから、「神は靈なれば、拜する者は、靈と眞理とを以て拜すべし」と聖書に教へてあります。又神は光なりとも教へてあります。光とは、愛と知識と淸との三つを兼そなへてゐる。だから、神は愛なり、神は智慧なり、神は聖なる哉。聖なる哉、と云はれます、神は聖なり、ですから、姦淫を犯すと罰されます。神は智彗なりですから、「審なる知識の中に神を保て」とあり、眞の知識のない人も亡び、國も亡びて行きます。神は愛なりですから、その子、獨子卽ち神の親の部分は、神の子の部分を世に現はして、人の爲に救の御用を働かせ給ふのです。顯人神であり、神の親と神の子とを兼ねて、さうして一つ生命に父と子とを兼ねて、さうして一つ生命に父と子と靈と三つのたましひをもつ三位一體の神、天地のもち主なる父、人

の救主なる子、聖くする爲、人の心に滿つる聖き靈と各異る事をして、働が異る計りでなく、「たましひ」が異る處のものが、一つの生命に屬してゐると云ふ神、只一柱でなく、只働が異る計りでなく、さればとて、三柱皆別々と云ふのでなく、三柱は獨り神にして、眼に見えない神で、限りがなく、量にはてがなく、凡ての時に滿ち渡り、凡ての處に滿ち渡れる神で、それがたつた一つ神、絶對の神であります。神は生命なりとは、他より生れず、働を起されず、他を生み。他に働きを起すものと云ふのです。人間は、他より生れて、他を生み、他より働を起され、他に働を起すものですが、それとは大に異つてゐるのです。

さう云ふ神は、そも〳〵誰ですか、聖書のマタイ傳や、マルコ傳や、ルカ傳や、ヨハネ傳やに記されてある主イエスキリストです。此の御方が生ける神で、顯人神で　實錄の神であり、天地創造の神、救主の神、裁判する神であります。

此の神を信じない人は、死んだ人です。たとへ大酒を飲まず、姦淫を行はなくつても、我が强く、物事に心配したり、失望したり、妄に怒つたり、人の惡口したり、人の好い事を嫉んだりします。から云ふ惡魔式の人間を止めるには、柔道に活を入れると生きかへる樣に、たましひの死んだ人が、生命を入れられなければならない。生命を入れられるには、此の本當の宗門を信じなければならない。ちよつとした基督道の眞似をして出來たインチキ宗門ではいけません。「救はれざるべからざる他の名をたまはざればなり」です。主イエスにのみ、誰でも信じなければならない神が見付け出されるのです。

第二章

基督様はどんな御方か

上

基督様は誰でも、釋迦や孔子やとおなじに人だと思つてゐませうが、それは間違です。日本の人は、基督様を神と信仰することは六ケしい様ですが、天地の出來ない前に、天地をつくつた方で、人間の大先祖の居ない時から御出なさつた方です。御自分は神ですが、世間の人が本當の神が分らないで、あるとかないとか勝手なことを云ひ、又は、自分々々の考で勝手な神様を造

つたりして、拜んでゐましたのを、十萬億土もある遠方から、呼掛ると云ふやうな空な話で持切つてゐたのを、御心配になつて、御自分から眞の人間になつて、肉と血とのある人間の腹から御生れになりました。さうして、我は本當の神だと、御言を以て、おん行を以つて、それをお示しになりました。だから、小學校に行つた人は數學を教つたでせう。加法を知つてゐませう。基督様は、神と人との加法です。かみプラス、ひとであります。併し之は理窟や聖書の御言を數珠づなぎにして、茲にも神さまだと書いてある。あすこにもイエスは神だと書いてあると云つても、本當にしない人があります。私の集會へ或老人が參りまして、私共が始終基督様の御一代を見ると、神そのものの生命が見られます。神であるかないかは、基督様の御言や御行やが、二つとない生命の眞實だか何うだかで分るのだ。基督様は人と云ふトンネルの

外に、神様の汽車が走り出した様なものだ。などとお話してゐるうちに、其の人は、本當に基督様の二つとない生命の眞實にて、基督様の神である事が分りましたと申す様になりまして、其の人は、私に白狀して云ひました。私は前に基督様の神である事が信じられないで、或教會から退會させて貰つた人間でしたと。それから、幾年か經つて、其の人は、其の家族へ色々の遺言をしておきましたが其の中には「我は基督の神性を信ず」と書いてありました。今の日本では、神道の人は、八百萬の神を拜むのが、眞の日本人だと云ひますが、聖書にも、「汝等は神々なり」とありますから、今の日本人も、世界中の人も、みんな神々ですから、神道の人々の云ふ神々もみんなではないが、其の大部分は、神々と私共も申します、決して反對しませんが、併しそれは、神一人しかない神では、決して御坐いません。佛道は深く調ぶれば、

神はない事となりますが、一般の信者は神はありと致します。其の神と云ひ、佛と云ふのも、神道の人の云ふ所とは、違ふものではなくて、いくつかの神、いくつかの佛でありまして、「神々」と申すべきです。基督様は、只ひとりの神様で、御自分から、其の證據を見せて人々を救ふ爲に、人に顯はれた御方です。世界に數へきらないほどの宗旨があつても、二つとない顯人神卽ち人に現れた生命の神はないのです。宗門は、人だましだ。苦勞の多い世の中の人に、アヘンを飲ませて苦勞を忘れさする様なものだ。佛道では、アミダ様が極樂淨土で救つてくださるとか、耶蘇教では、天の父様が其の獨子を人間の爲に惜みなく下さつて、十字架の上に生命を棄てさせて、死んだ後に、天國へ入れてくださるとか、みんな夢の様な話で、此のくらひ大きい嘘はない抔と、社會主義と云つて、神も心もないと云ふ人々はさう云ひます。ロシアな

どの國では、お上からさう云ふ事を觸れて、宗門は信じないがよいと申してゐますが。そんなに罵られる耶蘇教は、本當の耶蘇教ではなく、沒落した耶蘇教で、天の父、天の父と云つたり、聖母マリア樣と云つたり、教祖ルツテル樣、預言者カルヴヰン樣と云つたりしてゐる連中の寢言です。神樣は、人に現れた方で、神その儘の生命を現はした方でなくては、誠にアヘンです。造り話しです。大きな嘘です。こう云ふ事からして、基督樣が神御自身であり乍ら、神を見よ、おれが神だと御現はしくださつた事は、誠に難有い事ではありませんか。それから基督樣は、神を現はす爲ばかしでない。それは何か。世の終りになつて、佛教では、「エンマラサ」と云つて、人の審判をすると云ふ畫がありますが、二人の王樣が如何にもきつい顏をして、此の世の最も嫌がる苦しがる事を見せてゐます。基督樣は、審判をなさるが「人の子」

卽ちあたりまへの人間として、さばきの坐にすわつて、ごくやわらかいさばきをなさるのです。しかし、罪につきては、ちつとも間違のないさばきをなさるし、又柔和であつても、ごく嚴格い處はきびしいのです。人間に死があるやうに、さばきもあります。死が來ない、審判がないと思ふのは、大間違です。でも、基督樣は、さばきが目的ではなくて、救が目的であります。「我此世に來たれるも、人をさばかんとに非ず、救はんが爲なり」とあります。基督の救は、社會事業と云ふやうな肉體の救が第一の目的ではありません。だから、「我は道を傳へんが爲に來たのだ、病を癒す爲ではない」と仰つた位です。しつかりした基督信仰がなくつてやる社會事業はしくじります。基督樣の御救は、私共の「たましひ」卽ち心にある罪、眼に見へない生命に深く食い入つた罪を救ふのです。「人の道教團」のやうに、「さいはひ」を目宛にし

て、人に罪を深く考へさせず、義を強く悟らせなくては宜くない。「生長の家」などの樣に、罪はないのだ。病はないのだ、眼に見える世界はなくて、只心計りは、確かにある世界だと云つても、人の本當の救にはなりませむ。罪を悲ませぬいて、罪の赦を願はせると、十字架に懸つた基督樣の罪の身代りになつてくださつた事が難有くなります。だから、救とは、罪を赦す計りでなく、罪をなくなす事、卽ち人を罪より離れて、此世乍ら淸くする事です。又愚より賢くする事、弱より强くする事です。だから本當のクリスチヤンは、知識から調べても、淸いか、淸くないかどうかと調べても、心が强いかどうかと調べても、決して落第致しません。及第しない人は、僞の信者です。

中

さて、基督樣が、どんなに御くらしになつたか、これから、それを御話しませう。基督樣は今から二千年前詳しく云ふと、今年昭和十一年から千九百四十年前に、ユダヤの國ベツレヘムに御生になりました。其の御出生は、只の男女間の交からではありません。天地のつくり主であり、世界中の救主ですから、そんな異常な御誕生は、當然過ぐる程です。昔の信條と云ふ信ずることの箇條書にもありますが、私の近頃、しらべて〳〵こしらへた信條には、次のやうに記るしてあります。

ひとりの主、イエスキリスト、その獨り子、天地の創造者、言葉、聖靈により處女マリヤより肉身となり給ひ、ポンテヲ、ピラトの時十字架に懸られ、葬られ、三日目に死ねる者の間より起され、天に昇り、父なる神の右に坐し、生ける人と死せる人とを審判せん爲に來り給ふことを信ず。

天の父なる神は、言葉として現れもせず、肉と血とをもつて、世に現はれたのでなく、基督は誠に處女マリヤから聖靈によりて生れ給ふたのです、不思議と云ふよりは、主自らの神性としての御働きにより、自然を超えた力で御生れになつたと信ずれば、當然過ぎる事で、其のはては、人間全體に取つて、内なる生命の爲に信仰の爲に、言葉で現はされない程のえらひ事です。

嬰兒なる主イエスは、ヘロデ王の難を避けて、エジプトへ、母に抱かれ、父親ヨセフに守られていらつしやいましたが、まもなくナザレと云ふ山里に御出になりました。そこにダビデ大王の血統に當る養父ヨセフ又同じ血統をもつ母マリアと云ふ良き遺傳と「ぐるり」とに養はれ、多分寺小屋流にずつと勝つたユダヤのシナゴツグの教育を受け給ふたと思はれます。十二歳の時、國祭、過越節を守るべく、國都エレサレムに御昇りになつて、宮殿に於て、當時の學者達と問答をして驚かせ、又兩親も、イエスを見失つたと云ふ意外な出來事に面くらいましたと云ふ事です。

三十歳から三十四歳の間に、此の驚くべき大きな宗門の土臺をおいた程の御働をなさいましたので、世界の人々が其の一代記を書くに大困りに困る程の込み入つた出來事があるのです。それは一々新契約聖書で御覽になると分ります。只大體のそのまた大體を拾つて申上ます。

馬太と云ふ御弟子の書いた馬太傳と云ふのに「山の上の説教」と申すものが載つてゐます。それは、神を信ずる事につきて、祈禱が大切ですが、祈禱は、往來などで、日蓮主義者の樣な題目を團扇太鼓で合せて騒ぎ廻る樣な事をしないで、祈禱は人に見せたり、又名聞の爲でないから家の中で靜かに聽いてくださる神に靜かに祈るが宜しい。又獻金とか慈善とかも、人の前に見

せる爲にするな、寄進帳に美しく見える樣に表札に書き立てられる爲にするな、右の手のする事を、左の手に知らせるなと御教になつてゐます。又神は空の鳥野の百合の花も見事に養つてくださつてゐるから、あなた方を御困らせなさりはしない。心配は罪だとやうに仰つています。一日の苦勞は一日にて十分だと仰つています。又行狀につきては、男女の間の色情を愼む事を教へて、

凡て情欲の爲に、女を視る者は、既にその心に於て彼と姦淫を犯せるなり。と教へ給ふた。血氣の人が意馬心猿の喩の樣に、打勝ち惡い情欲には、英雄さへも城を傾けると云ふに何うして勝てるか。「美人と云ふも骨計りなり」と悟らせる諦の道位では、追附かない。之と異つて、神のみ前に。

「主イエスよ罪なき生命を與へ」給へと祈り〳〵、百萬遍でも祈つて、清き生命を守り通せと云ふのです。契もするな。出來もせぬ事を前約束をするな。人を怨むな。是も殺生戒を犯す事になるぞ。愛は仇を返さない事だ。愛と云はゞ、敵をも愛せよだ。仇に恩を施せよと云ふのだ。敵でなくとも、友達、御主人、父母などへは、無論愛を盡せと云ふのだ。敵を愛する人は、太陽を善人にも惡人にも輝し、雨を義人にも不義の人にも降らせ給ふ神の子となれたのだと、勵まし給ふた。

又世間のつきあひの道としては、傳道をするのだが。之も全く望のない人には止せ。

犬に清なる物を與ふる勿れ、また豚の前に汝等の眞珠を投ぐる勿れ。と御さとしなさいました。又人は盜賊も持つた龕燈燈提のやうに、自分を照さないで、他人の方計り見るが、それは宜しくない。

他の眼にある塵を取らないで、自分の眼にある梁を取れ、と仰つたのです。終りに主イエスの御言を行ふ人は、岩の上に家を建てた人だが、御言を行はない人は、砂の上に家を建てた人だ。大水の時に、一方のは流れないが、一方のは流れるぞと、御教へなさいました。

次に馬可傳を見ると、誤つた功名心を御戒になりました處があります。基督様の母マリアの姉妹と云ふのが、ガリラヤの漁夫ゼベダイの妻になつてゐました。其の子に、ヤコブとヨハネと云ふのがありました。彼等はキリスト様の御弟子になつてゐました。すると、その母と其の子二人は、基督様がなんでも御出世なさりさうだ。王様にでもなりさうだ。さうしたら、左右の大臣にでもならうと望んだので、何でも早いが宜しいと、三人そろつて御願に來ました。處が、イエス様は斷然御斷りになりました。

私の國は此の世の國とは違ふよ、私の國では大いものは小さくなり、人を事ふものは事へる者になるのだ。私も多くの人の身代りになつて、罪の身代として、間近に十字架の上で死ぬのだよ、それが極くえらい人の道だ。と仰つた。

又ルカ傳を見ると、善きサマリヤ人の喩があります。或年若の紳士が、主イエスの許へ如何にも道德自滿、信仰高慢でやつて來ました。「私はモーセの十戒も守つてゐます。あなた様に伺ひます。あの誡にある己の如く鄰を愛せよと云ふ鄰とは一體、何でせうか」と、主に伺ひをたてました。主はそこで、此の喩をなさつた。或旅人が、エリヤの野原で、强盜に出遇つて、持物は取られ大怪我をしたが、其の時宗門の教師が通つたが、見ぬ風をして通り過ぎた。又准教師が通りかゝつた、その怪我人の近く迄行つたが、かゝり合にて

もなつてはいけないと、是も亦いつてしまつた。教師や准教師やよりも、閑もないサマリヤの商人が通りかゝつた。之を見て、やあ御氣の毒だ、助けてやらうと、自分の乘つてきた驢馬へ怪我人を乘せて、旅館に連れてつて、出來る丈の親切を盡したと云ふ御話をしてから、「偖、君に聞くが、此の怪我人に對して、どの人がその鄰かね」。パリサイ宗と云ふ人を欺瞞す事に慣れた人は、何と答へた。此の頃でも、僞の宗門教師は、私共しらべぬいて御話をすると「それは私共の御話し來り、又信じてきた事を御話しくださつたのだ」抔と詐辨を度々きかされますが、恰度、主は、其の紳士から「ごまかし」の答をきかされ給ひました。

その人をあはれんだ者です。

サマリヤ人は、彼等が異邦人卽ち鹿兒島人の云ふ「よそもんさん」と憎む者ですから、サマリヤ人なりと云はないで、「その人をあはれんだ人」だと、別の言葉を功に考へて「ごまかし」を云つたのです。

ヨハネ傳と云ふのに、基督樣の一番弟子とも云ふヨハネが書いた基督一代記ですから、色々深い御話しがあり、基督樣が神であり、生命である事が明に記るされてあり、ニコデモと云ふユダヤの國會議員への問答、毒婦サマリヤの女の悔改の話し抔名高いものが載つてをります。別けてもヨハネ傳十七章は、主イエス樣の御祈禱です。イエス樣でさへ御いのりをなさつた位だから、私共にも、御祈禱が大切です。基督道は、他の敎に比べるものゝない位、いのりを貴ぶので、いのりの道敎團と云つても宜しいのです。

下

基督一代記の中で、反對者と幾度かの對論に、主イエスの知識の優れてゐた處、十字架にかゝる御決心をなさる爲、血の汗を流して、夜を更かしたゲツセマネの御祈禱の事、反對者の迫害の爲、良心の弱いロマよりユダヤへ遣はされてゐたポンテヲ、ピラトと云ふユダヤ總督のイエスに對する無罪の證明のため、手を洗つたりし乍ら、遂に故がなくつて、カルバリーと云ふ處で、十字架にイエスを懸けさせたこと。富限者ヨセフの墓に葬られ、三日目に入瞑したまひしイエスの起きいで給ひて、四十日間は、ユダヤに於て、度々、弟子たちとお會ひ遊ばされたこと、エライヲンの山から、天にお昇りになつた事などは、一々聖書に美はしく又たゞしく書き記されてありますから、幾度も繰返して御覽なさへ。

聖書には。「言葉肉となり給へり」、「神肉となりて現はれ」、「肉になりて現はれ給ひたるイエス、キリスト」、「此のパンは我肉なり。此の杯は我血なり」、「我は、眞の食物なり、我は眞の飲物なり」、此の外に、肉と血と云ふ言葉が、澤山書いてあるが、之は深い理由があるのだ。地獄を見た人がない樣に、神を見た人はないのだ。處が神が見られたら、人は餘程物が分る樣になり、又道德を大事にするやうにならう。イエス樣は、前にも云つたやうに神御自身が、我々と同じく、肉と血とをもつて、我々の住んでゐる世界に、神のある生きた證據となつて、其のイエスなる人の御生命の中に、神の御生命を藏めて御出になつて、我々に常恒の生命を見せたり、我々にも、同じ常恒の生命を授けてくださる御約束なのだ。永くユダヤに實際に御住ゐになり、しかも、十字架の上にて劈かれた肉、流された血をもつて神の在す證と、人への契ひの常恒の生命の確かな事を證しなさつたのだ。顯人神は、ばけものではない。

狐狸のわざではないのだ。これは、父なる神にも聖靈にもなくつて、主イエス様に計あつた貴い貴い事である。主イエスは、大方このやうな方であり、このやうな事をなさつた方である。又今迄でも、今でも、此の後いつ迄でも、御再臨の時迄でも、働いていらつしやる神様です。

第三章

人

山川草木、悉皆成佛と云ふ佛教は、なほ無神論は唱へつつも、近頃は彼等が永く詛ひ〳〵した生命とか、人格とか、云ふから、神は生命で、人は生命達と云つても反對すまい。天にある星だの日だの、星だの、と違つて、又は、山や野やにある花だの、鳥だの、獸だのと違つて、人は何故萬のものゝ頭だと云はれるのであらう。それは、人は、神様の生命と同じに造られ、悟る生命、罪のない生命、愛のある生命に造られたからだ。それに、人間の外の色

々の物は、人間の爲に造られたのである。

神言ひ給ひけるは、我儕に象りて、我儕の像の如くに、人を創造り給へり、即ち神の像の如くに、之を男と女とに創造り給へり。彼等を祝し、神彼等に云ひ給ひけるは生めよ繁殖よ地に滿盈よ之を從服せよ、又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ。神云ひけるは視よ我全地の面にある實子のある諸の草蔬と核ある木果の結る諸の樹とを汝等に與ふこれは汝等の糧となるべし（創世記一の二十六乃至二十九）。

ヱホバ神土の塵を以て、人を造り生氣を其の鼻に噓入れ給へり。人即ち生靈となりぬ。（創世記二の七）。

前にも書いた通りの神樣が、人間だけは、其の生命を持つてるものに創造なされた。只異る處は、神は靈計であつて、肉がなく、人は靈の外に、肉のあるものと創造られたのだ。人は、神の人柄のやうに似せて造られたと云ふよりも、人は神の生命と同じ生命に造られたと云ふべきである。だから、聖書には「人即ち生靈（生命をもつ者）となりぬ」とある。

又、聖書には、「汝等は神なり」（約十の三十四）とありまして、神と人とに、絶對と相對と、大と小との違のあることが教へてある。或人が、私に次の樣に尋ねられた。

人は神になられますか。

これは、東の邦々の人たちの能く尋ねる處です。神が人になつたり、人が神になつたりされると思つてるからだ。又凡てのものは、佛だ、佛は、凡ての者だとか云つてるからだ、基督道では、人が神になられないと云ふが、それは間違だなどと、誹つてゐるからだ。

私は直に答へた。

人は神になられるとか、なられないとか云ふのではない。人は始めから神であるから、そんなことは考る事も要らないのだ。だが、人は神々であつて神ではない。グリシヤ語の聖書には、只獨の神を「セヲス」と云ひ、神々を「セヲイ」と云つてゐる。

詩篇八十二篇の六節を見れば、次の様に記されてある。

我いへらく、なんぢらは神(神々)なり、なんぢらはみな至上者の子なりと。

同じ篇の七節には、

然ど汝等は、人の如くに死に、もろ〳〵の侯のなかの一人の如く仆れん。

「セヲス」は、生れもせず死にもせぬもので、「セヲイ」は、生れては死ぬるものであるから、どんなに、神と崇められ、生き神様として禮拜されても、生れもし、又死にもするものは「セヲス」ではなく、「セヲイ」だ。だから、人間を「セヲス」でなく、「セヲイ」であると知ることは、我邦の今日に於ける信仰の道にとつて、是も大切なことだ。遙拜と云つて校長さんが遠方へ行つてゐると、留守の生徒が、屋根の上に昇つて、遠方を見て禮拜をする。又之に似たことが澤山ある様ですが、猶太教及基督道としては、三千年前から、人間を「セヲイ」即ち神々であるとするならば、全く意味のない迷の仕わざである。

此の人は、何時創造れたか。(一)世の始の時に一どきに創造られたと云ふこと、(二)世に人が生れる時に直ぐ創造られると云ふこと、(三)木の實が、次の代の木の親となり、次の代の木の實が、その次の代の木の親となる様に、一度創造られたアダム(男)とイブ(女)とが次の代から代と、いく代と傳

はると云ふのと此の三つのお話しがありますが、何れが本當か、創造主でなければ、よくは分らないが、私は、「三」の説が本當ではないかと思ふ。

人と罪との關係につきては、どんなに考へたら宜しいのか。罪とは何であるかとは、外の處で説き明しましたから、茲には、それは申さない。只罪は人が造つたのか、神が造つたのかと云ふことだが、或人は、人が罪を犯す樣になつたのは、創造主が下手だとか、又創造主は、天の父でなく、天の父の命令で、創造たのだ、即ち創造主は第一番のものでなく、第二番の者で、完き者でなかつたから、それで、人は此の樣に完くないものとなつたと云ふのだ、それなら、人には罪の責任はなくなつて、創造主に責任がある譯だ。併し創造主は完き者即ち基督樣であつたが、創造主に責任はなく、罪を犯した人間に責任があるのだ。カルヴヰンは「神は罪の創製者ではなく、人の罪の創製者ではなく、人の罪を犯すにまかせた」と云つた。

此の罪の人に傳はるについて、大小の差を立てる人々がある、オーガスチンや、荀卿やは大の方で、ペレヂウスや孟子やは小の方です。又罪の行はるゝにも、二つのお話しがあり、一は即ち、アダムの元の罪が子々孫々に傳はるとするのである。又他のは自分の犯さない先祖の罪を子孫におはせるのはひどい、それでは神樣を不公平とするのだ。罪は、自分自身で犯すのだ。今眼の當り、各人が現在犯すのが罪であるとする。とにもかくにも、人が、罪の世に生れ極く始めの、即ち世の始からの罪の行はる處におかれて、他人の罪の傾に習ひ、始の義を失ひ、自分でも新しく罪を犯すのは事實である。

しかも、此の罪によりて、他の生物の味ふことの出來ない者で、即ち自由のある心、決して、他の生物にはないものをもつてゐる事、獨立とか、善と

惡とかをさとる者である事、世界中で、一番偉い者であることが悟られ、又此の人々は、個人個人計りでなく、神の自由に基く個人の自由から始まつて、仲間（社會）の間で、入札をしあふ掟をもつやうに造られ、或日本の學者達は、人間は始に統治者がたつた一人であつて、後で治めらるる者が多く起つたのだ、是が日本の國體だと云ふさうだが、世界の歴史にも、日本の古典にも書いてない事を云ふが、世間では肩書を尊びて、本當だと信ずる、これが博士と云ふのだ。言海と云ふ字引に博士を「はかし」と書ひてあるが、之を濁らせて讀むと、ばかし（馬鹿師）である。

又此の罪のなかつたら、神自らが人の罪の爲に自らを遣はし、血と肉とを具へ、此の罪の赦の爲に、此の罪の清の爲に、十字架の上に死したることも要らなかつたのである。事實は、此の人の罪の爲に、神自ら人の爲に、第二の創造の仕事をなさつたのだ。之によりても人間の尊いことが分つたのである。

これ（神が）已自ら義におはさんため、またイエスの信仰の者を義とし給はんため、今の期に於て、その義を表はし給はんとてなり（ロマ書三の二十六）そは我等は造られたる者にて、善き行のためにキリスト、イエスのうちに創造せられたればなり、此は神がそのうちに我等の歩むべきために、豫め備へ給ひしところなり。（エペソ二の十）。

茲に、人間の靈魂は死なゝいか何うかと云ふことがありますが、これは、未來の事を云ふ方に讓りませう。だが、此の世で罪がなくなるか、なくならないか。即ち清められるか何うかのことであるが、それは茲で記しませう。

「清め」のことの前に、義とせらるゝことにつきて、一寸云ひませう。今迄は、義とせらるゝとは、罪を赦される事で、罪のなくなることではない、と、ロマ書を引いて、いろ〳〵と、論ぜられましたが、前に引いたロマ書三の二十六でも、神様も罪があるが、罪をない者と、假に裝ふ爲だとしたら、宜しくはあるまい。「神自ら義におはさんため」で、義でない者が義をよそはふのではない。人間が、十字架の基督様によりて、義にてある爲にとあるべきで、義と裝ふ爲ではない。義となる爲である。又聖書には。

そは我等もし敵たりしとき、その子の死によりて神に和がせられたらんには、尙ほ和がせられたる〔後〕、その生にて救はるべければなり。（ロマ書五の十）。

されば一〔人〕の曲事によりて、すべての人にまで罪に定めらるゝことの〔及びし〕如く、その如く一〔人〕の完うせられたる義によりて、生を義とせらるゝに至ることも、すべての人にまで及べり。（ロマ書五の十八）。

今迄のクリスチヤンは、救はれたと云つても、罪を犯したりしてゐたり、義しくなかつたりしてゐる滑稽があつた。救とか、清とか、生命とかを別々に分けて考へたりした爲に義とせらるゝことも、尙ほ〳〵分らなかつたのである。此等は、「生を義とせらるゝ」「その生にて救はる」とあり、基督様の生命にありて、生命を義とせらるゝ、即ち生命を義と變らせていただくのだ、生命を義と稱へらるゝとか、義と裝ふとか、義とならない者を義と飾らるゝとかではない。虛榮心の多い女の御化粧の樣に人に見せびらかす爲の義ではなく、神の前には尙ほ更ら、見せびらかすのではない。義とせらるゝとは、義に變るのである。さうすると、「清めらるゝ」のとも同じで、義とせらるゝ

は、神と大衆とへの關係に於て云ふ言葉で、「清めらるゝ」ことは、神と個人とに於て云ふ言葉である。從つて、救とは、神と人と己とに於て、罪のなくなること卽ち愚から賢に、罪から清き、（罪なきこと）に、憎より愛に、弱より強に、媿より美に變ることである。終りに、多のクリスチヤン、しかも牧師迄も迷つたり、間違つたりしてゐるから、「清め」が現在に於てなさるゝか、死んでから後になさるゝかについて、聖書の言葉を以て、現在の「清め」であることを引かう。聖書には、「たる」卽ち「てある」の半過去詞を用ゐてる。

神を讃美し、すべての民に喜ばれしかば、主は**救はれたる者**を日に循ひて集會に加へ給へり。（聖使徒等の行爲二の四十七）。

〔書狀〕をコリントにてキリストイエスに在りて**清められたる**神の集會に、彼等の處にても我等の處にても到る處にて、我等の主イエスキリストの名を呼び賴むすべての者と同に、**召されたる**聖徒等に〔贈〕。（コリント前書一の二）

汝等は朽つる種にあらず、朽ちざる〔種卽ち〕神の生ける常に存する言によりて、再び生れたるなり。（ペテロ前書一の二十三）。

第四章

基督信者の守るべき心得とお行儀と

上

島津齋彬と云ふ鹿兒島の殿樣は、

古の道を聞きても唱へても身の行にせずは甲斐なし。

と云はれた。その通り身に行ふのが大切だ。だが、心のうちに、よく分らなくても甲斐がない。道理ではない理窟ではないと、知識を直ぐ消做す人があるが、それは「無知識は死罪に當る」と云ふ神の御言葉に背く、基督信者は、

知識と行との二を兼なくては宜くない。（ロマ書一の卅、卅一。エペソ四の十三）。

或人は、基督道の求める德は、「心を盡し、靈魂を盡し、力を盡し、意を盡して、主たる我等の神を愛し、また己の如く人を愛するなり」と云つてゐる。併しこれは、舊契約聖書の申命記と云ふのにある言葉であるから、一層、これは、ユダヤ教の求める德である。主イエスは、汝等に新しき誡を教ふると仰つて、次のやうに教へられた。

汝等互に相愛すべし。

「新しい」と云ふのは、今迄にもなく、これからもないと云ふのでなくては、「本當の新しい」ではない。世界中の教にも之はなかつた。今迄の教は、低い者が、高い者の爲に德を行へと云ふのだ。支那の書經と云ふ本には、「下の爲に忠を成す」と云ふ言葉がある、「上の爲に忠を成す」ことに缺いてゐて

忠よりも孝を第一にした支那の邦柄では、下剋上（下が上に剋つ）と云ふ言葉さへあつて親子萬代、君臣三年と云ふ語さへあつて、餘りに民を主にし過ぎてゐたから、今の君をなみして民計りでやつて行かうと云ふ「赤」黨であつたから、その樣に云つたのだ。だから、君は民の爲に、民は君の爲に、親は子の爲に、夫は妻の爲に、妻は夫の爲に、主人は僕や婢やの爲に、僕や婢やは主人の爲に、人は仇の爲に、仇は人の爲に、互に愛を盡すと云ふのは、基督樣の前にも後にも敎へられなかつたから、「新らしい」と云ふのだ。「相互に愛する」更に「敵をも愛する」のは、基督道の求める德だ、支那に「兼愛」と云つて、血肉の近い者も、血肉の遠い者も、均しく愛せよと云ふのに對して、孔子の敎では、敵に報ゆるに德を以てしたら、恩に報ゆるに何を以てしたら宜しいと罵つてゐる。基督道では、之に對して敵に報ゆるに恩を以てし恩に報ゆるに、德の德を以てすべしと答へるのだ。

併し、基督道では、基督樣の御生命、御人格、御行狀は、基督信者の御手本であるから、それを第一の手本とする。第二の手本には、モーセの十誡を用ゐる。其の儘でなくて、新契約の光を以て、「勿れ」に「爲よ」を加へたり又第四誡の安息日云々には、改正を加へて用ゐる。つまり、その形でなく、その精神を用ゐる。茶の湯にも、表千家と裏千家とある樣に、モーセの表十誡、は、ユダヤ人が用ゐ、基督信者は、モーセの裏十誡（近頃、基督信者の墮落者が、山師になつて、釘で石に疵をつけて、モーセの裏十誡などと唱へて、古の事の知識のない人達を魅かしてゐるのとは大に異る意味で）卽ち「勿れ」と共に「爲よ」の方からも學んで見やう。私は、之を、忠神、忠君、忠親、忠鄰人と云ふ四忠の道として、說き明かしませう。

第一、忠神の部。

なむぢ我前に我の外神ありとすべからず。

之は、二つなき神を神と知りて、之を崇め、之を禮拜することだ、さうして、此の新しい宗門が、二つなき神なしに、多くの神を建てたり、人としても不十分な教祖を神として崇めたり、どの教でも、同じだ、併しどの教も同じではない。一になれとは云はない、互に親睦しあつて批評してはいけない。たゞそれ丈だなどと云ふかと思ふと、萬の教は、一になれ。商賣根性で我宗派に來いと云つては宜くないと云ふ。併し彼等は、基督道も神道も佛道も本當に分らない上に、基督信者も、佛道信者も、神道信者も、自分の宗派に來い、我家に來れと云ふ大商賣根性があつて僞つてゐるのだ。何の教もよく分らない上に、何の教も崇めて居ないのだ、だから、そのついてゐる所から破

門されるのは當り前だ、至誠がない人々なのだ。萬の教が同じなら、親睦を計れば宜しいのだ。併し萬の教には、決して差別なしに同じではない。同じ高峰の月を見る各別々の登山者はない、佛道と基督道とは山が甚だ異つて居るのだ。詰り佛道も分らず、基督道も分らないからだ。此の第一誡は、そんなのを戒めたのだ、又此の誡では、ロシヤにある「赤」黨のやうな考、二つとなき神をなしと云ふのも戒めてゐる。又人中心を唱へて、二つとなき神を認めないフアツショ（人間の力を無上に崇めて、王の我儘を認める人々、目宛の爲に手段を選ばず、腕の力を用ゐたりする人々、政と祭とを二にしない人々、王樣を、傘にきて、己の利を計り、其の實は王樣に背く人々）をも戒めてゐる。又口に神を崇めて、行に於て、己や己の家やの爲を神樣そつちのけにして行く事を戒めてゐる。

第二、忠神の部。

なんぢの爲に、偶像また上は天、下は地あるひは地の下の水の中にある凡ての者の形を作る勿れ、此等に拜跪しまた事ふること勿れ、そは我エホバなんぢの神は妬む神にして我を惡むものには、父の罪を子三四代に至るまで罰し、我を愛しみ我法律を守るものには、千代に至るまで恩を與ふればなり。

神を拜むには、聖書に教ふる通りにする事である。グリシヤ語のプロスクネヲと云ふのは、天使でも、基督樣の母でも、基督樣の直弟子でも拜まないのだ、パウロもバルナバも、ヨハネも人から拜まれることを強く拒んでゐる。日本では此のプロスクネオを亂暴に用ゐてゐる。日本の人の心の開けてゐない爲か、安になつてゐる。〇〇祭などと「祭」の言葉も徒に用ゐられてゐる、

基督者も、世の迷の人と同じことをしてゐる。燒香だの、花の供物だの告別式だの、甚だ聖書の戒に背いてゐる。今のうちに改めねばならない。

聖禮典を守らないのも、又禮拜の仕方を聖書の教の外に增したり、減したりするのも此の誡に背くのだ。又此の誡にそへてある賞も罰も、神が此の事を强く云ひ現してあるのだ、恩は千代、罰は三四代として「妬む神」とあるのを、世間の人は、甚だ反對する。それは日本精神卽ちやまと學びのない爲だ。序に云ふが日本の國體や、日本の精神やは、歌の中にあるのだ。歌なしにそれらはないのだ。又分らないのだ。歌の一首も本當に詠まれない人が、英語や獨逸語やは出來て、學士とか博士とかの肩書のある人が、日本の國體が何うだの、日本精神が何だのと、本を書いたり、演說をしたりしてゐるのは、笑ふべきである。此の「妬む神」でも、歌のよめる人なら反對はしない。

その歌は忘れたが、第五句の「ねたくもある哉」。それだけは今も忘れずに、はつきり覺えてゐるから、それに外の句をつけて見やう。

紅葉のかく美しき秋の野に友のこざるがねたくもある哉

友に紅葉を見せなかつたのを強くなげいたのを「妬む」と云つてゐるのだ。

神は、善を強く愛し、惡を強く憎むと云ふのだ

第三　忠神の部。

なんぢの神エホバの名を妄に云ふ事勿れ、そはエホバは其の名を妄に云ふ者を罪なしとせざればなり。

耶蘇教略問答には、次のやうに說き明かしてある。

神の名をよび、その聖號、聖德、聖禮、聖言、聖業を清くして敬ひ用ゐることなり。

近頃の例で云ふと、或教派では、小さき本八千部計りを、其の筋から賣ることを差止められ、其の本は取り上げられた。或本屋の人は、之からは、神社の事を書くとやられますねと云つた。私は決してそんなことはない、其の筋では、神社を拜まないでも、法律では罰しないのだ、只神社を謗ると宜くないのだ。あの本は、神社の合祀（あはせ祭ること）につきて、嘲けり笑つたり、又神社に偶像のないのに、偶像と云つたから宜しくなかつたのだ。其の筋では、基督道の會堂でも、之に亂入したり之を謗つたりすれば罰して來たのだ。基督道を信ずる人を非國民だとか、國賊だとか、不忠の民だとか云つたから、さう書いた本を、政府が絕本したことがあつたのだ。

聖書の記事を削つたり、罵しつたりするのも宜しくないが、それにも增して不都合なのは、基督道の大先輩であり乍ら、「聖書に歸れなら聞えて居る」

と云つて「基督に歸れなら聞えてゐる」と云はないのは、聖書を基督樣より崇めてゐるので、從つて、基督樣を傍寄したのだから、此の誡に背くのだ。

又或人は、基督樣と其の直弟子達の敎を完き者でない。それより後の敎が完きものだと云つた。又或人は、それよりも今日の基督道は、今迄の基督道よりも最も深いと云つた抔は甚だ間違つてゐる。私の著した「基督道對照」は、今日の東京の基督道講壇と禮拜とを寫したものであるが、それで見ると、其れらに驚くべき程の間違があることが分るのだ。

又「神も佛もあるものか」「天道是か非か」とか云ひ、又自分を信仰して、神を信仰せず、其の爲に心配をするのは、「神殺し」「基督亡し」で罪となるのだ。本當の信者は、人に不意におどかされても、强盜に這入られても、叛軍に襲はれても、ピストルで擊たれても、ニコニコとしてゐる筈だ。

又これは小さい事だが、此の度、洗禮を受けなかつた某大臣は、基督道の儀式を以て、葬られたのは甚だ宜いが。若い時に、洗體を受けて、今も時々聖書を讀んでゐた某大臣は　禪宗の儀式を以て葬られたと云ふが、こんなことも普段、神とのかゝはりを明にしなかつた爲だ。日本人は、此の誡を犯して嚴しい神罰を受けないやうに、能く能く考へるがよい。

第四、忠神の部。

安息日を忘れずして、これを聖日とせよ、六日のあひだ、働きて凡て汝の工を爲すべし。第七日は、汝の神ヱホバのやすみなれば、汝凡の工をなすことなかれ。並に汝等の子、女、僕、婢女、畜および門內にある旅人をも然せよ、そはヱホバ六日のあひだ、天と地と海と、其の中にある一切の物を造りて、第七日目にやすみ給ひたればなり。此のゆゑにヱホバ安息日を

祝ひて、これを聖日とせり。

基督教略問答には。

ほかの日にはなすべきわざも、遊も、此の日には、聖く息むなり、止むを得ざることゝ、矜恤のことを除くのほかは、公私に於て、終日神に事へてくらすことなり。

自由教會信仰問答には、

耶蘇一週の初日に、死人の中より甦られし故、基督信者は、之を主の日と唱へて守るなり。

モーセの十誡は、天地のつくられることを紀念する爲に、神の天地をつくられし業を息みし爲に、第七日を安息日とし、基督信者は、主イエスの甦りを紀念する爲に、即ち日曜日の朝、主の甦り給ひしを以て、第一日を聖日と

し、主の日と云つて使徒の時から守つて來た。舊契約聖書を重じ過ぎる或派では、使徒行傳を說き間違つて、第七日即ち土曜日を聖日としてゐる。

我等は、主の日の奴隸となつても宜しくないが主の日を惡く扱つても宜くない、普段の仕事は六日の間によくして、第一日は、禮拜、獻金、傳道、慈善の爲に專ら用ゆべきである。又此の休息は、牛馬の爲にも人の爲にも、丈夫である爲に必要なことは度々試驗されたのだ。會は、此の日を守る信者によりて榮え、邦は、此の日を守る民によりて榮ゆるのだ。

下

第五、忠君、忠親の部。

なんぢの父と母とを敬へ、汝の神エホバの汝に賜ひたる地の上に於て、汝

の命を長からしめんが爲なり。

聖教信徒問答には、日本人として味ふべく又賛成すべき句を使つて說き明してゐる。

我は父母と上に立つ人々とに敬愛を表はし忠義を盡し、又其の分に應じた る從順を以て、諸々の善誨と懲治とを受け、又其の人々の行屆かぬ所を忍ぶべし、そは神の聖旨は、其の人の手を以て、我等を統御することなればなり。

忠孝を十誡に入れてあることは、基督道十誡が他の宗門や、經典やに（佛道の經論・儒道の四書五經に比べて）優つて貴いことであるのは、別の處に書いたから、茲には書かない。此の誡の添へ書に、忠臣孝子に此の世に於て「萬歳」を重ぬる約束のあるのに注意すべきである。

第六、忠鄰人の部。

殺すことなかれ。

此の誡は、道理に叶つて、自分の生命も、他人の生命も守ることを求めるのだ、自殺も宜しくない、それは人生に對する卑怯である。又人の生命を正當に守らねばならない。人を嫉み憎み、憤り怒り讐かへしは、神の前でのかくれたる人殺しであるから、此等を戒めてあるのだ、政を取る人は、「民衆の生活の安定」を計らねばならないと云ふが、それも入用だ、日本の農村の五十億の負債もなくさねばならない。社會的基督道を說くのも入用だ。此の誡は只人を殺したり傷けたりすることを戒める計りではない。役人が暴力團を取締る爲に、劍を帶ぶのも宜しいとするであらう、從つて慈善の業もせねばならないが、一番大切なのは「心の生活の安定」である。それには傳道を

以て、人への第一の慈善とすることである。

第七、忠鄰人の部。

姦淫することなかれ。

此の誡は　男と女との間の操に缺けた思と言と行ひとを戒めてあるのだ。是は神の憎み給ふ罪である。私が或所で、此の十誡の説教をして、此の第七の處で、「女中を胎ませて、墮胎したりする人が、日本にもあるが、甚だ宜しくない、姦淫は第八の「盗む勿れ」を此の誡は兼ねて居るのだ……云々」と云つた。すると、聞いて居た或人が、席から離れてしまつた。私は、其の人にお客でもあつたか、又は、他に用事でも起つたかと思つてゐた。其の夜は、それで濟んで、翌日、信者の家を訪問すると、信者は私に云つた。

先生、昨日は甚かつたんですね、あの人は先生のいふ通の事があつたので

すから、席に居たゝまられなかつたのです。

私は、

さうか、私は、ちつとも、そんな事は知らなかつたのだ。へへイ。

と、之を非常な事だつたなと思つた。

此の性の慾につきては、容易に打勝ち難いことであるから、絶えず「主イエスよ、罪なき生命を與へ給へ、アメン」又は「主イエスよ罪なき生命を續けさせ給へ、アメン」と祈るべきだ、百萬遍でも、千萬遍でも祈り拔けば、打勝るゝのだ。此の罪を脱れなければ、事業も失敗し、發明も出來ないし、家も邦も亡ぶるのだ。「英雄色を好む」は宜しいが「英雄色につきて罪を犯す」では宜しくない。

「仁を好む、色を好むが如くせよ」で、色を好む心で信仰を好み、學問を

好み、仕事を好むべきである。

第八、忠鄰人の部。

盗むこと勿れ、

裁判所の罰する竊盗、强盗を始め他人の物品を我有とする惡き企て、不正の權衡、尺度、斗量、貨幣、貨物、高利などに、神の禁じ給ふことは宜しくない、又一般の貪心、神の賜を亂用等は勿論、鄰人の益を計らず、他人の求むることを故なく拒む事、貧民を助けぬこと等は、此の誡の求むる處に背くのだ。「虚言は盗賊の始」と云ふ事も眞だ、私の知つてゐた夫人は、さう生活に困る人でなかつたが、虚言をよく云つた。すると、其の子は、學校に行つて、人の時計だの其の外のものだのを盗んで、學校から退かせられた。此の外に故なく他人の助を受くるのも宜しくない。獨立することを、此の誡は

求める。恩給も、時々、人を怠けさせ、遂には、高利貸の爲の御奉公となる。すると、恩給は其の人への恩給でなく、高利貸への恩給となつてしまうのだ。

第九、忠鄰人の部。

汝の鄰に僞の證據を建つること勿れ。

聖教信徒問答には。

我僞ごとの證人となりて、人を誣ひざる事、人の言辭を曲げざること、人を讒謗ざること、能く聞かずして、輕々しく人を咎むことに雷同ぬこと、尚ほ且つ諸々の詐僞と欺騙「インチキ」の類は、惡魔の業なれば、神の重き怒を蒙るべき恐あるにより、之を遠くこと、法廷及び其の他諸々の職務をなす時、眞實を愛し、正直に之を語り、又之を云ひ顯すこと又力の及ぶ

限り、人の名譽と權利とを護り擴むる事是なり。

私は此の第八誡と、第九誡との區別は、どうしてつけるかに迷つた、佛道では、口業とて、口の罪に、惡口、綺語、兩舌、妄語の四を擧げてある。モーセの十誡の第九誡は、之に似てゐる。佛教の不偷盗がモーセの十誡の第八誡に當るかとも思ふ。

第八誡は、重に人の所有物と人の待遇とに對してであり　第九誡は、人の精神の上にかゝるのではあるまいか。自由教會問答には、

僞の證言を爲すべからず。何人をも欺くべからず、他人の害となるべき風評を流布する勿れ。

とあるによりても、さう思はれる。

ホーリネス派の人たちが、集會の時に、「アーメン、ハレルヤ」と云ふ。是は、其の證しと其の祈りとに對して贊成する意を表はすのだ。ハレルヤは、手取り早く云へば、「萬歳」である。我等は、人々に對して、「眞實萬歳」即ちアーメン、ハレルヤと云ふべきだ、自分も人に對して「アーメン、ハレルヤ」、人も我に對して「アーメン、ハレルヤ」でありたい。今迄說いてきた忠神も忠君も、忠鄰人も、いづれも、「アーメン、ハレルヤ」である。それには、僞を去つて眞を宣べねばならない。結局眞を述べるのは、基督傳道をすることだ。それが第一に於ての僞の證をしないで、眞の證をすることである。

第十、忠鄰人の部。

汝の鄰人の家を貪ること勿れ。鄰人の妻と其の下僕、下婢、牛、驢馬またすべて鄰人の物を貪ること勿れ。

之は、已に不滿足で、他人のこと他人の物などうらやみ、憂へ、之を貪る

ことを戒めてゐる。此の誡は、心の中の事を戒めてゐる。いつも〳〵ニコニコして、凡ての事感謝し罪を離れて、清を惠まれたる生命と生活とを悦んでゐることである。此の終の誡に於て、心の上のことで結んであるので、第一誡より第九誡までも形の上だけではなく、心の上の罪にならぬ樣考ふべきである。

茲に今迄、日曜學校などで歌つた數へ歌があるから附け加へておく。殊にユダヤは日本と同じく句の頭に「イロハ」を並べた歌があるから、面白いので、附け加へておく。

一つとや。
ひとりの外に、神はなし。
其の名を、イエスと申すなり。

二つとや。
不動、觀音、地藏尊、
形のあるもの拜むなよ。

三つとや。
安にエホバの名を云ふな。
神のみ前に、罪となる。

四つとや。
夜、晝、勵みて働きて、
安息日をば、能く守れ。

五つとや。
いたはり、敬へ、父母を、

なんぢのいのちの、ながくなる。

六つとや。

むつみ愛して、世を渡れ、

人をばいため、殺すなよ。

七つとや。

なむぢ、姦淫する勿れ。

神のみ前に、罪となる。

八つとや。

やぶれた衣を、着るとても、

他人の物を、盗むなよ。

九つとや。

心にもなき、僞の、

證をたつる、ことなかれ。

十とや。

鄰の人の、持ち物を、

すべて貪る。こと勿れ。

第五章

悔改と信仰と

基督道には悔改と云ふことがある、之は、グリーキ原語で、メタノイアと云ふ。反省の上に、心を變へることだ、後悔計か、回顧みて、己の惡を止めて善の一切を行はふとして、之を行ふことを云ふのだ。惡を悔ゆる許りでなく、惡を再びなさないことと、それ計りでなく善を行ふことである。佛教の懺悔とも異る處は、それは己の惡を考ふる方へ傾き勝ちで、扣へ氣味で、之は善き事をする爲に、强く働き掛けるのだ。

耶蘇教略問答。

生命に至る悔改は、神の仁惠によりて受くる德にして、人自ら罪あるを悟り、また基督の中に神の慈悲を信じ、其の罪を悲み惡み之を棄てゝ神に立歸り、心を定めて、之に事ふることなり。

基督教問答。

眞實に、其の罪を悔改めるものは慚愧と悲嘆とを以て、之を告白するのみならす。先づ第一に、罪惡を赦されんことを眞心より望み、自今罪を犯すまじとの志を堅固にし、之を去りて神に歸順ることなり。

聖教信徒問答。

問。人の眞の悔改、即ち改心には、幾個の區別あるや。

答。二個の區別、即ち舊人の死ぬると新人の復るとのことなり。

問。舊人の死ぬるとは何ぞや。

答。心眞に罪を憂へ、又これを悲みて益々これを避くるを云ふなり。

問。新人の復起るとは何ぞや。

答。心實に神を歡ぶこと及び諸々の善行をなして、神の御意に從ふ生活を樂しみ又好むことをいふなり。

問。如何なる行爲を善きと云ふや。

答。眞の信仰より出で、神の律法に循ひ、其の御威光を顯はさんとて爲るものゝみにて、我等が自身の考說にも人の訓示にも本かざるものなり。

カルヴヰンは、メタノイアを說き明して、「企及心の變化」と云つた。私は悔改とは、「生命の轉換」と云ふ。日曜學校の學者の說によると、人の生變ることの一番多いのは、滿十六歲五ケ月だと云つてゐる、老年にならないうちが悔改に最も適してゐる事の證據になる、併し私は更に〳〵人の變化に力を盡すのは、幼稚園の時、卽ち滿三歲から、滿六歲だと思ふ、此の時では人間の全面を變へることが出來る。私は幼稚園經營者として、經驗してゐる、だから、主イエスも、

然るにイエス彼等を呼びて曰へり、幼兒等の我が許に來るを許せ、且つ彼等を禁ずる勿れ、そは神の國は此の如き者等のものなればなり（ルカ傳十八の十六）。

と仰せられたのだ。抑も幼兒は變化の一切を持つてゐるから、惡い所は悉くなくなつて、善い所計りになれるのだ。天國に這入るものは、少しの惡い所があつてもならないからだ。大人でも、心の低い人は、强情で變りにくいが、心の高い人は、柔和であるから、改りやすい、神の御心と知れば、直ぐ從ひ、

人の云ふ事でも、聖書に叶ふことなら、一言も云はずに循ふのだ。本當に悔改めたクリスチヤンが多くなれば、日本は眞の神の國となるのだ。

蓋し、悔改める人は第一、基督様を能く知ること、基督様に能く祈ること、能く基督様の御心を行ふことをする。悔改めない人は、自分の勝手で、基督様を知らうとせず、基督様に祈ることも、基督様の御心を行ふ事もしないのだ。之は世間の人計でなく、所謂基督者にも牧師にも澤山ある。

此の悔改も、結局は、信仰の意味と餘り變らない、信仰とは基督様を知ること基督様の御心を行ふことであるから、此の悔改は、凡ての惡を止めて、凡ての善き行をすることだと云はゞ、悔改は、基督様を知ることで罪を悟り、又自分の力の足らないので、

主イエスよ、罪なき生命を與へ給へ、アメン。

と百萬遍も祈りつゞくるのであるから、かくて、凡ての善きことを行ふのであるから、悔改は、信仰の凡の意味の中に入り込むのであるから、卽ち知識にも祈願にも、行狀にも這入り込むのだから、悔改と信仰とは同じだとも云はれる。悔改と信仰とは、何れが先だとか、後だとか云ふべきではあるまい、基督様をお客にして、罪のある自分を主に於て省みるのが悔改で、力のない自分の力を客に於て、基督様の全き能力を主として仰ぎ望む卽ち自分を賴まずして、基督様を專ら賴むのが信仰であるのだ。でも、信仰をパルトの様に神の奇跡と云ふのは、間違ひだ。（エペソ一の十九）。

彼の能の働に循ひて信ずる我等に對して、その力に如何に優れて大なるかとを、汝等の知るに至らしめ給はん。

と、茲に「信ずる我等」とある通り信ずるは、人間の自分である。

自由意志を賜はりし人は、その神の賜物を自分で用ゐるのだ。若しさうでなかつたら、信仰は、神の奇跡であるならば、不信仰も神の賜であるべく、惡魔も惡人も、神の奇跡で、不信仰を與へられて、今も後も常恒の地獄にすみ込むことゝなる譯だ。そんな不公平な、不都合なことを神はなさる筈はないのだ。だから、信仰も、不信仰も、人間の心からの働であるのだ。天使と善人とは、自分の心から信仰に住み、惡魔と惡人とは自分の心から、不信仰に住むのである。

大昔、埃及のパロ王は、災のうちに苦みの時は、モーセとイスラエル人との國へ歸ることを約束しては、災の外に出ると、之を行はないで、遂に其の臣達と共に紅海に溺れ死んでしまつた。又クリスチヤンの名を持つ人々でも、或教派の如きは、萬國の人の爲に祈るよりも、イスラエル人の爲に專ら祈れ。常恒の理智的信仰よりもリヴアイヴアル（新契約聖書に、リヴイヴアルは一言葉もないのに）とか、火（之は、罪を消すこと、憎の代りに愛を燃すこと、愚を離れて賢くなることの意味であるのに）とは、只迷信の宗旨の樣に、感情の燃上ることゝ思ひ違へる事からして、基督樣の神としての常在を忘れて、否それを思ふは、惡魔の誘惑だ、基督樣は今は御不在だ、（基督樣は神ではないのか）抔と消做して、基督樣の御再臨は、是非熱心に待望め、事によると、今年のラツパ節、九月十五日には、御再臨がある。衣服も賣つてしまへ。學校もやめろ、商賣をよしてしまへ、其の日近くには、祈り續けろ抔と、途方もない事を教へ、感情は大方不行儀であるとの通り、妄にそれを云ひ張つて無理に會を結べ、獨立もせよ何んな人にでも傳道師になれと勸める。さうして、國にも教にも害をなしつゝある。神は、之に色々と省みる折を與へ、

賢きクリスチヤンは、之に忠告しても、決して悔改めない不相變、自分は迷つて居ないかも知れないが、多くの人を迷はせてゐる、之が悔改ない良い手本である。心の化石した人だ。

又近頃は、新興宗門が、神様の代りに、自分を立て、やれみんなの罪や災やを「おひきかへ」して上るとか、「神のお示」を知らせて上げるとか云つて、多くの人を迷はせてゐる。又基督様よりも自分を偉い様にして、神様に代つて教へるとか、二つなき神様のお創造なさつた世界の眞實を打消し、人の罪のあるのをないのだ、只あるのは、心計りだと日本語も知らず、基督道も佛道も知らずして、甚い無道理を書き附けた本を、長い御札代りに人に買はせて如何なる病氣も癒したと虚言八百を云ひふらし、新聞抔に大きな廣告をして、浅はかな人達を迷はせてゐる又そんな人達計集つて法有我無教で萬教は一致だ抔と、一宗の信仰も定まつてゐない連中が、如何にも物識り顔して騒いでゐる。

分け昇る麓の道は異なれどおなじ高峰の月を見る哉。

などと云ふことは、山道とか基督道とか、一つ〳〵の宗門につきては云はるゝが、萬の宗門には當はまらないことだ、一神教にして、絶對性を主とする基督道と汎神教にして、相對性を主にしてゐる宗門とは、大元が異つてゐるが、表側だけは、同じことが、可成多くあつても、中味は全く異なつてゐるから私は千同千異と云つてゐる。これ等の人達は、心がごた〳〵してゐるので、悔改められないで、多くの人を迷はせ、自分々々も迷つてゐる。所謂、盲人が盲人の手引をしてゐて、共に地獄に落込むのである。

之に反して悔改むる人は、私の知つてゐる人にも多くある。中に著しい人

を擧げやう。私が都城に傳道した時、或獸醫に、「信仰の理由」と云ふ本と、舊新約聖書を貸した。彼は僅の間に讀み終つて、信仰を起し、洗禮を受けぬ前から、聖日を守り、遂に以前は、女と云ふ字に鍵を書いた額を、生駒山の聖天に上げなければならない樣に、情慾に負けた人であつた彼が、悔改めて、洗禮を受けた。受洗後、迫害の爲、職業を殆んど休まねばならなかつた。それでも屈せずに、或時は、農業までやつて信仰を續けた。會の爲に、長老となつて、忠實に盡した。紙器製造もやつて、少々の貯金も出來た。偶々、親族の女が、媿業を營んで居るのを見出し、其の貯金全部を投出して、之を救つた。彼程、忠實に熱心に主にも人にも事へた人は、他に見出されない程であつて、主の御許の下に彼は長生をして、入瞑し。此の世の天國より、彼の世の天國に旅立れた。是は悔改めた人の一の例である。

なほ一人は、今大阪に於て、文筆に於て、說教に於て、主に事へてゐる元船長がある。私は、長崎造船所のドツクに這つてゐた釜山丸と云ふ大阪商船會社の船に、便乘を許され大阪港まで來たことがあつた、其の時、油差の職にあつた彼と言葉をかはし、且つ其の部屋に同宿した。彼は如何にも放蕩無賴の青年であつた。女も買ふし、賭博もうつのであつた。が、此の頃、雜誌などに、クリスチヤンとして彼の名を見出すことが度々であるが、彼も悔改めた一人である。

なほ、悔改めない前に、雲州松江で、辯護士をしてゐた人がある。彼は、學問の爲に妻を離緣した人だ、二三回私は彼に傳道した、其の後四十年もたつた。しかるに彼は今や或派の一番位の高い所で働いてゐるクリスチヤンである。久しく遇はないが彼も悔改の著しい一人であつた。この樣な人々は

私の五十年間の傳道中には、數へきれぬ程あるのである。

第六章

祈禱

上

神様は、人が事更、いのらないでも、先様から、人のなくてならない物や、あつてほしい有様を御承知くだされて、それ〳〵を、私共に、宜しい様にあてがつてくださるでせうと云ふ方があります。それにつきては、面白い御話が御座います。私が鹿兒島に傳道してゐた時、城山公園の下、二の丸と云ふ處で、村上と云ふ辯護士の貸家にすんでゐました。特別傳道がありまして、

東京から石田祐安氏がつかはされて、私の宅にとまつてゐました、そこへ町の呉服屋さんで、淨土眞宗の人で基督道をも能く聞く人でしたが、なか〳〵信仰が起らない。云はゞ、漫性の求道者です。其の人が、石田氏に、祈禱につきて、無用ではないかと云ひました。すると、石田氏の云はるゝには、

若しあなたに子があつて、口がきけるのに、朝から晩迄、又春から冬迄、年から年中、ちよつとも話をしなかつたら、どんな心持がします

と聞いた、呉服屋さんの彼、實は其の長男が行衛不明になつてゐたので、いつも〳〵、その事が心の痛となつてゐたのだから、てつきり石田氏の言葉に、まいつてしまいましたから。

なる程御尤です。

と云ひました。

基督道では「いのり」は神と人との交と云ふ、神の生命を人に移す樋の樣なもので、又人の生命を清めていたゞくクリーニング器です、人は罪を犯せば祈らなくなり、祈れば、罪を犯さなくなります。

「いのり」は、人にいのつたり、自分に祈つたりするのでなく、神のみ前に、そのましますことを信じて祈るのです。信者でない人を、信者の祈りの會へつれてゆく、グウ〳〵いびきをかいてしまうのは、祈禱は、神の前にする事や、又神のいますことさへ知らないことやで、祈りに面白みを持たないから眠つてしまふのです。だが、いのりが習慣になつて器械的になると、神のいます事を忘れて、獨り言を云ふ樣になります。困り入つた境遇にある人が三時間も祈りつゞけると、さんびかが自然に口から湧て出で、暗かつた心が明くなりますことは常にあることです。いのりは、聲を出して祈ることも

必要です。又大勢と共に祈ることも必要です。又默禱と云つて、だまつて心で祈ることも必要です。

祈禱には、願と相談とさんびと感謝とがあります。世間の人が、祈禱と云へば、欲張なことを云ひつらねるのだと思ふのは、祈禱に右の樣にいろ〳〵あることを知らないからです。又禮儀のない人は、自分の事計り祈つたり、又は自分のことを先に祈つて、他人の事を後に祈つたりしますが、之等は、いのりにつきての行狀の修業がないからです。

又祈禱は、聲にも出さず、心にこれだとか、彼だとかとりとめた事もなしに、只祈が岩に喰ひ附いた鮑貝の樣に神樣の生命に、自分の生命を付けてゐる時を持つこともあります、信者のくらしを長くしてゐると、さう云ふ事を色々と經驗して行かれます。

神道には祝詞と云ふのがあつて之はいのりであります。之も、五穀の豐熟や國土の安全やをいのり、大方幸福を願つてゐます。

佛道にも、少は「いのり」の擬がある樣ですが、佛教に「いのり」がありません。題目を稱へたり、念佛を唱へたりしますが、祈と云ふほどではありません。日蓮宗では、祈禱があると聞くから、さがして見ましたが、容易に見當らない。四谷見附の大きな道具屋の軒下の石燈籠に、

武運長久、家内安全
現世安穩、後世安泰

とあり、是は多分、日蓮宗のものだつたと思はるゝ。

基督道には、ユダヤ教の時分から、「いのり」は多くあります。詩篇などは、全體が祈禱と云つても宜しい位です。ユダヤ教の時分を、舊契約聖書の時分

と申します。其の時の祈禱は、他の宗旨と同じく幸福を祈ることが多く、中には戰に勝つことを祈り、敵を詛つたものもあります。豫言者（神の事を人につげ、人の事を神に告げる役を預る人）の時分になると、人の行狀のよしあしなどについて祈つてゐます。又祈を捧げる目宛になる神樣も、力の强い計りの神でなく、聖き神、義しき神、愛の神であります、天地を創造者である計りか、罪のある人間の罪を赦し、之を可愛がつて、救ひ出す惠の神樣として敎へてあります。

新契約聖書の時になりますと、祈禱の有樣が變ります。第一、祈禱の目宛を神とか其の他の名を用ゐたのが、今度は、「主イエスよ」と云ふ樣になります。基督樣は、「義しき父よ」、「淸き父よ」と仰しやつたが、之は、多分、三位一體の父なる神と云ふより、御自分が人間としてのイエスが、神としての基督樣へ語られたのかと思はれます、此の後に御話しゝます「主の祈禱」の「我等が父よ、天にいます者よ」の父も、神としての基督樣を指すかと思ひます。聖書の他の處には、基督樣を父と云つた處が澤山あります。それは、私の著はした他の本に詳く書いてありますから、玆には書きません。只主イエスは、我名にありて父に祈れ（ヨハネ十六の二十三）、我名にありて我に祈れ（約十六の廿四）とありますのを、父を基督樣としなければ「父」と「我」とが別々になると、調子はづれになりますから、「父」と「我」とを同じにすれば、調子がそろうと思ひます。して、使徒時代卽ち始めの基督道の時には、石打にされた時のステバノの祈にある「主イエスよ、我靈を受け給へ」を始め、一切が主イエスを祈禱の目宛にしています。其の時分の本のいくつにも、基督信者は基督樣に祈つて居たと書かれてあります。それから少したつてから、近頃ま

ての基督者は、「天の父」とか「聖靈」とか祈つています。天主教やグリーキ正教やでは、マリヤや諸聖人やに祈つてさへいます、此等は、大間違です。只僅に感心するのは、「さんびか」の中の「いのり」には、其の七割が、主イエスにいのりをしてゐます。（新教では）。

下

扨これから、其の祈禱の手本として主が教へて下さつた「主の祈禱」について學びましやう。

祈禱の目宛につきては、既に御話し致しましたから、茲には申し上げません。

一、汝の名を崇めしめ給へ。

それは、「人間を通しての神たゝへ」です、詳しく云へば、神のいます事、神のみわざ、神のまつりごとにつきて、其のまゝに、割符の樣に、人間のくらしがあてはまる樣に行はることを祈るのです。これは、人間をぬきにして神樣だけで、神の榮光が現はれるやうに云ふのではありません。

二、汝の邦を來らしめ給へ。

これは、人間の働をも通して、サタナの國の亡び、神の邦が地上にも天上にも、いよ〳〵ます〳〵盛になる樣に祈ることです。

三、汝の心の天に行はるゝ如く地にも行はれしめ給へ。

これは、神の惠によりて、基督知識が完くなり、十分になり、之を十分に行ふ樣になり、天に於て御心の行るゝこと卽ちモーセの十誡や、主イエスの山の上の御說教やなどにあるやうに、忠神、（純忠神、偶像排斥、常恒頌德、禮拜專一、十誡の第一誡乃至第四誡）忠君、忠親（十誡の第五誡）、忠鄰人

（十誡の第六誡以下第十誡）が十分に行はれるやうになることを祈るのです。

四、我等がパン、なくてならぬものを今日與へ給へ。

今迄は高いことを祈つた。卽ち神の事を祈つたが、茲では、低い自分の事又人のことを祈るのです。我等の衣服、家、食物などを始め、人の世渡に入用な一切（學費、旅費、結婚費等）を祈るのです、今迄の譯文では（日毎の糧を今日も與へ給へ）とありましたが、これは、取越し苦勞をすることですから、そんなことをいつては間違です。

是故に明日のために心遣ひする勿れ。そは明日は〔明日〕自ら己が事を心遣ひすればなりその勞苦はその日のために不足なし。（マタイ六の卅四）。

と、思煩ふ勿れ、一日は一日の心遣にしておけと、主イエスは、此の祈禱を教へ給ひし山の上の御說教の中に、仰つてある通りですから、取越苦勞をする樣に祈つては宜しくありません。又、此の祈禱には、たましひの糧をめぐまるゝことも含んで居ります。

五、我等が債人に我等が赦したるが故に、我等が負債をまた我等に赦し給へ

別の譯には、「負債」を「罪」とありますが、ギリシヤ原語には、「負債」とありますが、之は自然「罪」をも含んだ上に、他のことを含むので、意味もあり、氣品もあつて宜しい。或人は、人の罪は赦されない、卽ち敵を愛されないから、此の祈禱を致さないと云ひます。成程それも正直ですが、主イエスの贖によりて、人を赦すやうに、祈れば宜しい。そのうちに赦される樣になり、減り降る神、敵をも愛する神の心に、自分の心もなれる樣になつたら、心安く祈れませう。私は、近頃次の歌を自分にも人にも歌つて、敵を愛される樣に修業しています。（八六八六八六八六の譜）。

一　天地つくれる　神なれども
世人のかたちに　現はれつゝ
己に敵なす　地の上の
人らを救ふと　つとめ給ふ

二　ナザレのたくみの　わざをなして
罪人の足を　主は洗ひて
十字架に迄も　つき給ひて
己の仇らを　救ひ給ふ

三　己を殺せる　エレサレムを
雛とも思ひて　母雞なす
み心もつ主は　愛の父よ

かれらを赦せと　祈りたまふ

四　仇なすユダヤを　あはれみたる
善きサマリヤの　人の心
宣べさせ給ひし　主を拒めば
望を斷ちたる　ユダとやならん

かくて、虎狼の如き荒々しい我等は、他人と親く兄弟として交り、共に榮へ、共に長らへると云ふ美はしき人間のくらしをすることが出來る。さうして、基督の贖によりて清められたる人も、前に澤山犯した罪の赦を願ふのである。

六、我等を試惑の中に導き給はず、惡より救ひ出し給へ。

これは、我等が、基督様の初弟子になつて、惡魔に面會して、彼に打勝つ

て見たいなんて云はないで、謙りて、主イエスの御力を頼むのです。私の知つて居る人は、そんな強がりを云つて、忽ち、躓いてしまいました。弱いうちに此の金は拾ふかどうかとの試惑に出遇ふよりも出會はない方が安全です。時には、惡魔の罠にかゝつて、身動が取れなくなります、其の時にも、主イエスに「主イエスよ罪なき生命を與へ給へ、アメン。」と、幾度となく祈りさへすれば、主イエスは、我等を罪より救ひ出してくださいます。又罪を犯さんとする恐ある時にも。

主イエスよ、罪なき生命を續けさせ給へ、アメン。

と、百萬遍も祈れば、習慣でなく、口ぐせでなく、懸命に祈れば、酒の欲、煙草の欲、女の欲、男の欲、どんな肉の惡い欲でも、心の惡い罪でも犯さない樣になつて、今迄、聖人が一人もないと云つて嘆いてゐた我日本に澤山の聖人が男にも女にも出來ます。いのらん哉、いのらん哉、いのらん哉。

七、是、邦と力と榮とはとこしへに汝のものなればなり、アメン。

これは、我等の祈は、國内の英雄とか、外國の聖人とか大牧師とかに祈るのでなく、只主イエスのみに祈り、只基督樣にのみ願ふと云ふ心を顯はすため、祈禱の終りに、神への頌榮歌を添へたのです。即ち邦と力と榮とは他にない、あなたにばかりあるのですと云ひ現はすのです。

今迄「かぎりなく」とあつたのは、飜譯の間違です、「とこしへに」です。「戀愛無限」では、戀愛が續くだけで、中間で別の男を愛し、又先の男に歸つて、愛が限りなく續きます。「戀愛常恒」とすれば、間に別の男など這入らずに、いつも〳〵、同じ男女間の愛が、衰る事なく、戀愛が續いて行く事です。神への敬愛が、「限りなく」でなく、「とこしへ」（常恒アイヲニアス）でな

ければなりませむ。アメンとは、あなたは私の祈禱をまこと（アメン）に聞いてくださいと云ふのです。又まことに聞いてくださるゝ事を信ずると云ひ現はすのであります。

第七章

聖書

聖書とは、何ぞやと云はば、新契約聖書テモテ後書三の十六、十七には、次の如くしるされてある。

すべて聖書は神籟にて成れるものなれば、教のため、罪の自認のため、矯のため、義に在る懲のために益あり。是れ神の人の、すべて善き行を爲し遂ぐるために適したる者たらんためなり。

支那に最初に來た新教の宣教師は、新契約聖書を「新遺詔書」と云ひまし

たが、之は英語其の外では、テスタメント即ち遺言と云ふ言葉を間違つて使つてゐたから、それを其の儘譯したから、元の間違通りに間違つたのですが、其のうちに、新約聖書と云ひました。日本でも、それを始は使つていましたから、日本譯が出來てもさう云つてゐました。處が、今は永井さんの新契約聖書が出來ましたが、皆さんは、新約と云つてよいか、新契約と云つてよいかに迷ひましやうが、此の語は、聖書の契約と云ふ言葉即ち血を以て約束するのを契約と云ひ、血を川ゐなければ、只約束と云ひますから、主イエスが、十字架の上に、人間の身代として、罪の赦さるゝ爲に、罪の清らるゝ爲に死し給ふたから、即ち神の血によりて、信ずる者に對して契約なさつたから、契約と云ふ方か宜しいのです、尤も約束も、時には契約の意味に用ゐられるから、それでもよい樣ですが、契約でない時にも用らゐれるから、矢張契約と云ふのが宜しい。契約も今は、血のない時に用ゐますが、固々、契約の方が血がなくつても、血のあるつもりの時に用ゐられる、即ち強い意味で用ゐられます。英語では、まだ表紙迄も新契約（ニュー・コベナント）としたのを見當りません、此の點は、日本の方が先に始めたのです。

聖書に新と舊とあつて、舊は基督樣より前にあつたのです、今から三千五百年も、古からあり始めて、基督樣より紀元前五六十年迄に出來上つたのでして、凡そ三十九卷あり、律法と歷史と文學と豫言との四つに別れてゐます。人々の行狀の爲になつたり、又祈禱の手本になつたり、又困難の時に喜んで耐へ思ひ、國や家や亡た時にも又興りませうとの希望を與へたりする事が澤山記されてあります。新契約聖書は、基督の御一代記を馬太と云ふお弟子と、馬可と云ふお弟子と、ヨハネと云ふお弟子と、それに外國人であつたルカ

と云ふお弟子と、一册讀切で、四册とも中味のちがつた一代記と、お弟子達の働の實錄と、パウロと云ふお弟子を始め其の外のお弟子達の手紙と、終りに、此の世より、未來にかゝつた惡魔と基督樣とのたゝかひの記錄とで、凡そ二十七卷、新舊兩方合せて六十六卷となります。聖書は、神の御言の記錄とは、大概の人たちが信じますが、一字一句間違はないと云ふ人と、さうではない、一字一句の違はあつても、其の大體の意味が、神の御示しだとする人とあります。聖書は能く〳〵しらべますと、ホントに神の御言葉であるのに驚かされます、或人たちは、只御儀式に讀んでゐたりします。或人達は、お弟子の時は、考が足らなかつたが、末の世になる程、偉い先生たちが出てきた。アウグスチンとか、カルヴヰンとか、ルツテルとかが、出てきたからとて、其の方へ心を取られてゐる人もあるが、それは大間違であります。

又或人は、舊契約聖書計を大事にして豫言が〳〵と騷いで、世間の迷信家がやるやうに、聖書を易かトの本として用ゐたりします。又或人は、蛸は食べてはよくない、豚もうさぎも、うなぎも食べては宜しくない、聖書に禁じてあるからだと云つてゐる、安息日は、土曜日だから、日曜日を聖日だなどと云つて守らないでも宜しいと云ふが、それは間違だ、舊契約は、新契約の爲に廢されたのだが、舊契約にある祭日も守らないでよくなつたのだ。だが、舊契約を全然讀まないのは又宜しくない。舊契約にあるヱホバとか、ヤーヴエとか、イムマヌエルとかはイエスキリストだから、ヱホバ云ひ給ふと云ふのは、基督樣が仰しやるのだから、讀まないのは宜しくない。イザヤ四十の三には、次の樣にしるされて、ヱホバは、基督樣に當るやう明に證明されてあります。

よばはるものゝ聲きこゆ云く、なんぢら野にてヱホバの途をそなへ沙漠にわれらの神の大路をなほくせよと。

其の外に、ヱホバは父なり。ヱホバは贖主なり、ヱホバは創造者なり、救主なりとあちこちにしるされてあります。（賽六十三の八、九、十六、賽十一の一―九、王下十九の十九、廿一、十六の九、十五の廿九、賽八の八、九の七、賽七の十四、賽六の五、賽八の八、九の七、賽五十二の廿一等）

聖書全體にてメシヤ（注膏者）は四十回あり、ヱホバは無數であり、基督は、新契約聖書に五百六十回あります位ですが、ヱホバ卽ちヤーヴエは澤山にあります。古い堀出しものゝ如く、舊契約的に基督樣の御言を多く認めらるべし、アブラハムへの三人の使にも、ヤボク川邊のヤコブの神人にもヱホバ卽基督樣を發見さるべし。又舊契約聖書は、敎育のない人の讀本となる。

一、ソドム、ゴモラを　亡ぼす示を
　アブラハムに告げし　三たりの使の
　一人はすなはち　顯人神なり
　知らずやそれこそ　主エスにありけれ。

二、ユダヤの邦なる　代々のひじり達
　かきのこしおきし　文にもかゝれぬ
　ヱホバはすなはち　イムマヌエルなり
　我たちと共に　います神なりと。

三、バプテスト、ヨハネ　さやかに云ひたり
　ヱホバのみ前に　道をしそなふと
　マリヤに生れし　ナザレ人エスを

古き御文の　エホバと定めて。
四、ゼルマニ人らが　詛ひたる文を
新に契の　み文と崇めて
ユダヤの人らの　文を崇めつゝ
新に悟れや　神に結ぶ道。
五、まじなひの文と　人なあやまりぞ
天地つくりて　人らを罪より
はなれて罪なき　生命に贖ふ
神を說く文と　古文あがめよ。

聖書は、學者が之を讀めば、學問上の發明の源となり、その上に、萬物の創造者、人間を再びつくりかへ給ふ神をしることが出來るのだ、一般の人は、

之を讀めば迷信に遠かり、心衰へし時の力となり慰となり、事業に於ける忍耐と希望とを與へ、疾病の時には、大なる慰安を與へられ、罪と戰ふ人には、「主イエスよ罪なき生命を與へ給へ」と祈り續くるならば、全く罪なき人と、なられるし、又罪に誘はるゝときには、「主イエスよ罪なき生命を續けさせ給へ」と祈り通せば、清められたる生命を汚さずにすまされたのである。教育勅語を捧讀するとき、儀式も大切であるが、其の勅語の御精神を味ひ奉らねば不敬に陷るやうに、聖書も、其の意味を誤りなき樣に味ひ奉らねばならない。さうするには、善き師に指導されることゝ、よき飜譯書とを持つことが大切だ、今の世界の大概の聖書は誤譯ですが、たつた一つ永井譯新契約聖書は、比較的誤りのないものであるから、それで讀むことが大切である。

聖書を拜むものはない筈だが、世間では、聖書が神の言葉だからとて、之

を拜む計りにして、其の聖書の指す基督樣を崇むる事を忘れる人がある。だが聖書信仰、聖書研究會と云つて、基督樣の會を開かない馬鹿ものがある。聖書の爲の基督樣でなく、基督樣の聖書である。それは基督樣も明に仰せられてある。卽ち次の如し、

汝等は聖書を搜る、そは其の中に常恒の生命ありと思ふが故なり。されどそれらは我に就きて證するものなり。然るに汝等は生命を有たんために、我が許に來ることを欲せず（ヨハネ五の三十九、四十）。

第八章

基督樣へ忠義を盡す爲の仕方

上　禮典を恭しく守りて

基督道に、是非守らなくてはならない禮典卽ち儀式が二つある、天主教とグリーキ正教とには、七つあるが、聖書に教へられてあるのは、二つである。主イエスは、次の樣に教へ給ふてゐる。

是故に往きてすべての國人を弟子とし、父と子と聖靈との名に入れてこれをバプテスマし我の汝等に命ぜしすべての事を護るやう彼等を教へよ。ま

た見よ、我は世の完成まで凡ての日、汝等のうちに在り、アメン。

（マタイ傳二十八の十九、二十）。

かくて時となりしとき、彼は席に着き給へり、また十二使徒も彼に伴へり、かくて彼等に對ひて曰へり。彼の苦を受くる以前に、汝等と共に、此の過越を喰ふことを望みに望みたり。そはわれ汝等に云はん、神の國に於てその成就せらるゝまで、もはやわれ必ずこれを喰はざるべければなりと。かくて杯を受け感謝して曰へり、これを取れ、且つ己自らのために頒てよ。そはわれ汝等に云はん。神の國の來るまで、われ必ず葡萄の實より〔のもの〕を飲まざるべければなりと。かくてパンを取り、感謝して擘き、且つ彼等に與へて云ひ給ひけるは、此は汝等のために與へらるゝ我が體なり。我のを憶ひ出づるためにこれを爲せ。夕食し給ひて後、杯をも等しく爲して云ひ給ひけるは、此の杯は汝等のために流す、我が血にての新契約なり。（路二十二の十四至二十）

舊教新教を通じて、バプテスマと聖晩餐とは二つの大きな儀式として守られてゐる。救世軍やクエーカー（宗派の名）やでは、之を守らない、又無教會と云つて、會を詛ふ組があつて、彼等の多くは、之を守らない、時には、人の特別の願によつて、バプテスマを行ふこともあるさうだ。だが、人間の心の勝手に、之を行はないのは宜しくない。救世軍が、希望社の如き社會事業團體が、しつかりした神の學びのなきために、世間的に墮落し、性の問題などにしくじつたり、追ひ〳〵、それを創めて造つたブースの志に反いて、基督の愛中心であつたのが、「救世軍○將○○○○來る」抔と、大鼓・たゝかせて、英雄を拜がませる會、人間を第一とする組合となつてしまつた。又精神〳〵と云つて、儀式を疏んずる組が、姦淫罪を犯しても、ぬけ〳〵と平氣な

顔をして、主イエス様が十字架の上にて、私共の罪を引受けて、全く罪の赦を成し遂げてくださつたから、罪は罪とはなりません。限りなく赦してくださつたから、もうそれは罪でありませんなどゝ云つて居る。又無教會の人などは、性の問題などでしくじつた人の寄合であるから、又自由とか獨立とかをはきちがへてゐる。自由とは、凡ての規則の全部に背かず、凡ての德の全體に叶ふ樣にして、只規則に縛られず、德の數々に捕へられず、規則の主となり、德の君となつて行くべきであるのを、彼等は、自分勝手な心持で、規則にも德にも心をおかず、自分々々の感じ一つに動いて行くのを自由だとしてゐるのだ。それ〳〵では、基督道の一人々々の自由でもなく、又社會の自由などは、夢にも見ることは出來ないから、團結卽ち互に約束を設けて、共に助け合つて行くことが出來ないから、家庭では、夫婦喧嘩や親子爭ひやが激しく行はれます。仲間同士でも小人數から小人數に別れてしまふのだ。

又新しく興つた宗教の中には、物の世間はない、只心計の娑婆だ。それだ、物がないから、病がない、罪がないなどゝ云つて、宗教は一つに歸するのだと云ふかと思ふと、宗教は別々にあつて、爭はないで、力を協せて行けば宜いのだ。それには、其の眞理を教へる本を讀めば、心の迷も、身體の病も癒されたのだ抔と說いてゐる。邪淫者で、佛教も基督道も分つてゐないで、分つた顔をしてゐる。日本語さへも一通りも知つてゐない。それでも、世の大學校の校長樣であつた人、大きい軍人さんなども、之に一致してゐる。大本教のやうに、祭と政とは一致してゐると云つて、遂に國の統治者に對して不忠を働き、ローマ法王の樣な位を占め、宗教王として、世界中を治めやうとはしなくとも、唯心計の世だと說く諸教は、形のあるものを拒むはてには、

國をも、國の支配する方をも拒む事にもなるので、非國民ともなるのだ。

教の中にも、バルト派など〻云ふドイツのクリスチヤンも「人なる者」を駄目（危機におくること）だとする者、日本の神學校と云ふ牧師を作る處々も、それにかぶれてゐるのが澤山あるが、それも、うつそりである。

此の樣な危い教を防ぐ爲に、心と共に物はあるのだ、對のない程大きい一の生命に心と物とが創造られ、卽ち一の元に心と物との二つが治められと云ふ道、右にも左にも、心にも物にも傾かない道、眞中の道が大切だ。

基督樣は、人の力も御認になつてゐるのだ、だから、人にもなつて顯はれ給ひ、其の御教の中に、人のすることに價を認めてゐたまふた。其の點から、信仰には、眼に見ゆる儀式も是非入用であるのだ。

殊にバプテスマは、十字架にかゝりて、人々の罪の赦と淸との爲に血を流し、肉を劈いた主イエスにありて、救はれたしるしであるから、人間は誰でも、相應な支度をしてから、之を受くべきである。ロマ書九の十には。

卽ち汝もし汝の口に主イエスを告白し、またその心にて神は彼を死人のうちより起し給ひしことを信ずるならば、救はるべし。そは心をもて信じて義に至り、また口をもて告白して救に至ればなり。

とある。「口を以て告白して救に至ればなり」とは、信仰を云ひ現はすことが、その云ひ現はし自らが救ふやうですが、それはさうではない、救ふのは、全く主イエスの御働きである。併し其の救は、受取ることがなければ、主イエスは決して救ふことは出來ない。口で云ひ現はす人の力計りでは無論よくないが、形を以て、之に合せなければならない、茲が唯心計りでは宜しくないと云ふのだ、口を以て云ひ現はすことが救ふのではないが、口を以て云ひ現

はして救を受取るのだ。バプテスストと云ふ宗派でバプテスマの儀式を八釜しく云ふのも無理はない。水に沈めなければ救はないと云ふのは、「注ぐ」と云ふ仕方ではよくない、「沈める」と云ふ仕方でなければ、救は受取れないと云ふのであらう。日本基督では、「注ぐ」のでも、「沈める」のでも、本人の願に任せて取行つてゐる。

聖餐に就ても、前と同じく、儀式ではあるが、之は、(一)我々の罪の赦(清めに至らしむる)の爲に、十字架の上に血を流し、肉を劈いた主イエスを紀念すること、(二)言であり、眞理であり、光であり、彼にあつて、父なる神、聖靈なる神を現はす子なる神であり、父も聖靈も血とを以つて來らず、只彼のみ肉と血とを以て來り給ひし神であり、只彼のみ神性の上に人性を加へし神であり、聖書に於て、

此の者イエス卽ち基督は、水と血とによりて來り給ひし者なり、啻に水にてのみならず、されど水と血にてなり。また證をなし給ふは靈なり。そは靈は眞理にておはせばなり。そは天に於て證をなし給ふ者は、父と言と聖靈と三つなればなり。また此等三つの者は一におはします。また地に在りて證をなす者は、靈と水と血との三つなり。されど三つの者は一のためなり。

と敎られてある處の神、卽ち父と言と聖靈とある言であり。靈卽ち神性、水卽ち人性、血卽ち贖とある處の方であり、日本語に云はゞ顯人神である方を紀念することであるから、信仰の上の最も大きい事を紀念する、最も貴い祝典である。

我等の罪の深きこと、神の淸なること、己に仇なす人の爲にも、敵を愛す

る心を以て、己の身をも犧牲にする神の恵（神には身はなけれど、人を兼ねたる神には人の身を兼ねてあるのだ）の大なることを、聖書によつて考へつゝ、感謝しつゝ、我等も、亦世の敵對する人達の爲にも大なる愛と謙遜とを以て、心身を盡すべきだ、之が天國の國體だ。之が神の國の臣民の精神であるのだ。クリスチヤンは、大きな心、人を容れる心、報を求めぬ心を、聖餐を守ることによりてもつべきだ。余は、此の心を養ふ爲に、自分で作つた歌を「さ迷へる者よ、立歸りて」の譜で、始終歌つてゐる。（九十頁九十一頁を見よ）

併し道の理解と實行とよりも、祭祀と儀式とを第一にする事は、低い宗門に附き物ではあるまいか。或は戒を授かつて、教主に女の大切なものを奉つたりして喜んだり。或は神佛に參詣して、良い心持がするとか、莊嚴の思がしたとか云ふ。さうして、其の人達は、戒を授かつたり、參詣したりした爲に、大層善き事をしたと安心し過ぎて、平常の心術や行狀に改まつた處がない計か、ちつとは惡い事をしたつて、赦して下さると思ふ處から、却つて惡い人となる位だ。

基督道の或大教派など、宗門教師の前に告白をすることがあるが、凡てではなくとも、教師を喜ばす爲に告白を作る事があると云ふ。先頃も儀式を能く守る教派の人が、或罪を犯して、裁判所に曳かれた。罪のある事に定まつたので、普通なら一時保釋されるのに。犯人が、神に告白したからと云ふので、明朗になりきつて居るので、判事の心證を惡くして、今に刑務所におかれてある。又同じ樣な風儀の中に育つた人が、大きな僞をしてゐた爲、行々は、或私立大學の校長にも出世される處だつたのを、全く失つてしまつた。それも若い時から、道を信仰する風を裝つて、信仰を賣物にし、先輩の喜を

買つて、中學から大學、大學から洋行と、最高等の教育を儲けた。今の世にも、教を信じないで、教を賣つて、人の尊敬を受け、金錢を絞り取るのも澤山あるが、或は、本當の信仰をしないで、儀式の下に隱れて、信仰を賣る者は、次の項にある會の爲にも、邦の爲にも甚だ宜しくない。

中　會を愛して

世間並に云ふと、會とは、教會であるが、西洋でも、今から六百年前から、教會（チヤーチ）と云つたやうだ。それ前は、只「會」と云つた。支那譯でも、只「會」と云つてゐる。グリシヤ語では、エツクレジヤと云つて、集會又は會の意味である。ブレザルン派で「集會所」と云ひ、富永德磨氏が、基督會と云つてゐたのも宜しい。松村介石氏も「道會」と云つてゐる。我等は、澁谷集會と云つてゐる。聖書は、無論「會」と云つてゐる。教にも、神の教と人の教とあるから、神の教の意味で教會と云はゞ宜しいが、只教會と云ふと、人の教の變遷の甚だしきものの會を意味して面白くない。

日本では、祖師と云へば日蓮で、大師と云へば弘法で、花と云へば櫻で、歌と云へば、三十一文字であるから、會と云へば、主イエスのエクレジヤである。世間の會は、對のあるので、まぎれ易いから、上にいろ〳〵のことわり書を添へるのだ。

聖書には、次の樣に、會について其の權力のあることを教へてある。

また汝の兄弟もし汝に逆らひて罪を犯さば、往きて唯汝と彼との間のみにて諫めよ。彼もし聞かば、汝の兄弟を得たり。されど彼もし聞かずば、二あるひは三の證人の口の上にすべての詞を立つるために、〔汝と共に〕尙ほ一〔人〕あるひは二〔人〕を携へよ。されど彼もし彼等に聞き從はずば、

集會にいへ。かくてもし集會にも聞き從はずば、彼を汝には異邦人また關稅人の如き〔者〕たらしめよ。誠にわれ汝等に云はん、何にても汝等の地にて繫がんものは天に於て繫がれてあるべく、また何にても汝等の地にて釋かんものは、天に於て釋かれてあるべし。復たわれ汝等に云はん、汝等のうち二〔人〕何にて求むるすべての事に就き、地にて聲を合せなば、天に〔おはす〕我が父より彼等に應へ給ふべし。そは二〔人〕あるひは三〔人〕我が名に於て集まるところ、そこに我は彼等の眞中に在ればなり。（マタイ傳十八の十五―二十）。

またずべてものをその足の下に服はしめ、且つ彼を集會のうちにてすべてのものゝ上に、頭たらしめ給ひしところのものなり。集會は彼の體にして、すべてのものをもて、すべてのものに滿たし給ふ者の滿ち給ふ處なり。

（エペソ一の二十二、二十三）。

主イエスは、右の如く、會に審判する力のあることを認め、パウロは、會は、主イエスの體であり、凡てを包みをさむる主イエスの滿てる處、會に於て、主は第一機關で、弟子達は第二機關であると云つてゐる。會其の者につく者が、神を第二の道具としては、甚だ不都合であるから、信者は、主は「會」の第一の道具卽ち頭であつて、第二の道具卽ち肢であるべきである。會があるから、英國や米國や其の他の邦々では、信者の獻金を集めて、世界へ廣く傳道もしたり社會事業もしてゐられるのだ、「さんびか」や聖書や、教の書やの出版も出來るのだ。

又會があつて、信仰を持つゞけ又德を建てることも出來るのだ、牧師でも會の役人でも會を遠かれば、漸く只の生れ乍らの人に歸つてしまう。私は貧

乏だから電車賃もないから會に出られない。學問の勉强も忙しいから、會に出られない。仕事に追はれるから會に出られない。婚禮があるから會に出られない、葬式があるから、會に出られない。人は、色々の云ひ遁れを作つて會に出ない。併しさうしてゐるうちに、信仰も消え、德もなくなつてしまつてゐる。或教派のやうに、主の御再臨が近いから、結婚の入費も學校へ行く入費も上げてしまへ、主の御常臨が第一だと云ふ說に魅かされてはよくないなどと云ふのは間違つてゐる。主の常臨とは何を意味して云ふか知れないが、主の常在（人でなく、神性をもつ神として）を中心とせずして云ふのなら、それは甚だしき冒瀆である、だから、主の再臨の爲でなく、神なる主エスの爲に、御入用だとあるならば、何をも獻ずべきである。それが眞の人情である。人は貧乏とか、家業が忙しいとか云つてゐて、會を愛さずにゐて、形の上の生活がよくなると、會には何も盡さないで、一錢の獻金もしないで、結婚の晴着や葬式の紋服やに身分不相應な金を掛けてゐる、私共は、墮落したクリスチヤンほど、世間に恐るべき惡人はないと思ふ。酒を飲まないとか、煙草を飲まないとか、芝居を見ないとか、カフエーに行ないとか云つて居る人で、世間からの聖人、會から見た惡人が多いと思ふ。此の點で、主イエスが、ユダヤの若き紳士が、宗門の話しをしにきて、如何にも德に滿たされた顏をしてゐたが、主イエスは、之に向つて、汝はそれ程、神を愛し、鄰人を愛するなら、お前さんの凡ての身代を賣つて、貧乏人に施し、さうしてから、私の弟子になりなさへと告げ給ふたら、彼は靑白い顏をして立去つたと云ふ御話しを思ひ出されるのだ。次にその本文を引きますから、能く御讀みなされ。

また彼の道に出で往き給ひしとき、一〔人〕走り來れり、かくて跪づきて問へり、善師よ、常の生を嗣ぐために、われ何を爲すべきや。然るにイエス曰へり、何故に汝は我を善といふや、善は一、即ち神の外にあるなし。汝は誡を知る、姦淫すべからず、殺すべからず、盜むべからず、僞の證を立つべからず、欺き取るべからず、汝の父と母とを敬へ。乃ち彼答へて彼にいへり、師よ、我は幼少よりすべて此等の事を衛れり。さればイエス彼をつら〳〵視てこれを愛し給へり。かくて彼に曰へり、一つ汝に缺くるなり、往け、汝が有つ程〔のもの〕を賣り、且つ貧しき者に與へよ。されば汝は天に於て寶を有たん、かくて來れ、十字架を負ひて我に從へ。然るに彼はこの言のために憂へ哀しみて去れり。そは彼は多くの資産を有ちたればなり。（マルコ傳十の十七―二十二）。

下　邦を愛して

十誡を說き明す時にも、或點は話したが、基督道程、君に忠を盡し、邦を愛することの調に叶ふものはあるまい。さう云ふと、佛敎や神道やの人は、大に反對するのであらう。それなら聞くが、佛敎は神がないと云つて、君があるとの道理にどうして、其の神なしと云ふことが叶ふか、基督道の神ありと云ふ說の方が、君ありと云ふことに相應するではないか。又神道の人も我等に反對するであらうが、それなら聞くが、今迄を省みよ、其の前、藤原の時、平家の時、源氏の時、北條の時、足利の時はおいて、之を問はずとするも德川氏の時、皇室に對して、如何なる不敬を働いてゐたか。神道の人は、云ふだらう、その時は佛道が國の祭祀で、神道は末社の役をしてゐたから、

仕方がないと云ふか。それなら、其の忠義に力が弱かつたと云はれても答が出來なからう。それに、神道の樣に二百以上も祭神がある。即ち八百萬の神々があつても、一君萬民と云ふには都合が惡い。即ち多君多民の形になつて、甚だ都合が惡い。又神道だと、餘りに一國主義で世界萬國と共存共榮を致すに宜しくないではないか。世の平和にも相應しないではないか。戰も時には必要だが、一國絶對主義では、常の戰ずきになりやすいではないか。

このやうに考へて見ても、基督道の說く一大父（基督）四海兄弟（日本、支那、歐米其の他）は、世の平和をきたし、萬國も、主達の主、又王達の王（默示錄十七の十四）に統られ、一切の統治者も歸一られ、眞の共存共榮が樂しまれるのである。一國に限りても、一神の道は、一國萬民の主義に符合のて、過ぐることも足りないこともないのである。

モーセの十誡の第四誡に「汝の父母を敬へ」とあるのは、イスラエル人に、未だ君のなかつた時、即ち士師（今の大統領）もない時に、二百萬の民の首領としてのモーセのこしらへたものであるから、「王を」と云はない。邦となつてから、サウル王、ダビデ王、ソロモン王などのある樣になつては、此の「父母を」は、邦の父即ち王、邦の母即王妃となつたのだ。イスラエル人は、サウルにも、ダビデにも、ソロモンにも如何に忠義を盡したか、歷史の證して居る處である。ダビデの臣、三人が敵の陣の眞中をつつきつて、其のうしろから、水を汲んできたこともあつた。又此の誡は、親孝行の教である。十誡に忠君、忠親を教へてゐる處は、他の教の誡にはないのだ。

又主イエスは、魚の腹から、金を得て、稅を納めて居る。

又ローマ書十三章第一節乃至八節には、邦と王とに事ふることを教へてあ

る。

すべての魂をして上に在る權に服はしめよ。そは神よりにあらざれは權あることなく、在るところの權は神より立てられたればなり。されば權に抵抗する者は神の定に逆らふなり。また逆らふ者は己自らのために裁を受くべし。そは長等は善き行の懼にあらず、されど惡しき〔行の懼なり〕。汝は權を懼れざらんことを欲するか、善を爲せ、さればそれより讃を得べし。そは善き事の爲に、汝に對する神の事へ人なればなり。されど汝もし惡を爲さば懼れよ。そは徒に劍を帶びざればなり。そは神の事へ人にて、惡を行ふ者に怒をもて報ゆる者なればなり。かるが故に服はざるを得ず、唯怒のゆゑにのみならず、尙ほ良心のゆゑにも。此のゆゑに汝等も貢を納めよ、そは彼等は同じく此の事のためにも、餘念あらざる神の仕う人なればなり。

是の故にすべての者に對して、その義務を致せ。卽ち貢を〔受くべき〕者には貢を、關稅を〔受くべき〕者には關稅を、畏るべき者には畏を、敬ふべき者には敬を〔致せ〕。汝等は互に愛を負ふの外、何をも人に負ふ勿れ。そは他を愛する者は掟を成就すればなり。

又ペテロ前書第一章第十七節には、次の如く敬神と忠君とを求めてある。

すべての者を敬へ、兄弟を愛せよ、神を畏れよ、王を敬へ。

クリスチヤンは、國の法律を守り、稅などは怠つては宜しくない。又鄰人への慈善も他の敎の人に劣るべきではない。併し道に叶はない納め金や人の德を建てない獻金やは致す可ではない。此の頃、商人や敎會やが、押付けてくる品物や活動寫眞等の切符やは拒むべきものであらう。また信仰の自由を妨げるおきてを作ることにも反對すべきである。日本の憲法二十八條は、世

に類の少いよい規則であり、即ち税を納める事と、兵隊に出ること丶亂を起さないことの外には、全く自由であるから、信仰の上での特別な規則を作ることには反對すべきである。其の筋でも宗教法案を出す事は〇〇〇だ。

又主イエスは、ルカ傳第二十章第二十五節に於て、

かくて彼は彼等に曰へり。是の故にカイザルの物はカイザルに、また神の物は神に納めよ。

と教へ給ふてある通り。祭と政とは、二つに別れて行くべきである。之を亂ると大本教や其他の似而非愛國組やのやうに、邦の害となるのだから、會は政府の反感を受けたり、國教めかしたりしては宜くないから、どこ迄も獨立つもの、民でたてた者でなければならない。外國の補助も受くべきでなく、又外國の宣教師に監督されたり、外國の會に籍をおいて、二重の邦の戸籍を持つたりしては甚だ宜くない。神を敬ひ、邦を愛するものは、此の點に心を用ゆべきである。又基督道の運動にも、妄に外國の金を多分に貰つて、會堂を建てたり、不自然に傳道をしたりするのも、神の爲にも、邦の爲にならないと思はる丶。

終りに、英國の自由教會信仰問答の一句を記しておかう。

耶蘇基督の外、何をも首と認めず（教會内に於て）國家の抑壓干渉なくして、基督の律法を釋し、之を施行ふの權利を實行ふ教會是なり。

第九章

未來の事は何んなに考へたら宜しいか

上

本當の基督道の説く未來を知るには、先づ基督道に近い佛道の淨土眞宗の説く處を學ぶのがよい。

淨土眞宗では、確かな證據がなくつて、只人の心持（觀念の上）で、それを眞としてゐるから、そのあることが、眞であるとする、人の思で、それをありとして、それを事實でありとする。眞宗の學者は、淨土のありと云ふのは、それは造り話しだ、我等は只「南無阿彌陀佛」と稱名すればよいと云ふ。或は、如來のありと云ふも、極樂淨土のありと云ふも、虛言だとも云ふ。併しお寺の方では、そんな學者は、寺から放逐してしまう。さうするは、淨土はありとするのだ。近頃は、現在にあると云ふのと、未來にだけだと云ふのと、互に爭つたりしてゐる。さうして、其の淨土は、どんな處かと云ふと、「往生要集」と云ふ本には、此の世の肉の上の苦と樂との樣なことを書いてあつて、心の上の事ではないから、如何にも造り話しのやうに思はれる。それでも、人の心の中には、未來を信ずる心があるから、それを全く疑はないで恐れるのだ。私なども、年の若い時、禪宗寺に行つて、地獄極樂の圖を見ると、こんな事があるものかと思つても、何となく、恐が心に湧いた事があつた。

近頃、親鸞上人の教を說く人が、隨分間違つたことを云ふ。どんなに惡い人の罪でも如來は赦す。限りなく赦すと云ふ。併し知識がなくとも、悔改がなくとも宜しい。又罪のない者とすると云ふ望をも說かない、これでは、人の行狀の惡い處が淨土となるから、淨土は不淨の處となるのだ。又淨土は、愚人罪人計りの所で、罪のない賢聖の居る所ではないわけだ。又信仰迄も如來がしてくれるから、衆生は只如來にお任せすれば、宜しいのだ。併しそれでは、バルトの云ふ信仰は、神わざだと云ふのと同じで、神が惡魔や惡人やを地獄にやるのは、不公平だとなるのだ。その上に淨土への救の事に、かゝはりの深い如來のある事も、夢の樣な話しで、ある事の證據が立たない。如來のある事の證據が立たなければ、淨土のある事の證據も立たないのだ。

基督道の方にても、天主教だの、グリーキ正教だのは、未來に「煉獄」と云ふのがあつて、人間の死後、直に地獄とか、天國とかへ行かないで、「煉獄」と云ふ處で、傳道されたり、悔改めたりして、それから天國に行き、或者は傳道されても、悔改めずして地獄へ行くと云ふ。之は彼達のお行儀のよくならない源である。聖書にはさうは說いてない。ルカ傳十六章十九節乃至三十一節を見ると、次の樣に書いてある。

また或る富める人ありき。また彼は紫と細布とを着て、日に循ひ華やかに樂めり、また貧しき者ありき、その名はラザロ、彼は全身に腫物ありしが、彼の門の邊に置かれて、かの富める人の食卓より落つる。パン屑にて饜かされんことを望めり、されど犬さへ來りてその腫物を舐れりかくてかくありき、貧しき者は死ねり。乃ち彼は天使により、アブラハムの懷にまで連れ往かれたり。またかの富める者も死にて、葬られたり。かくて彼は陰府

にて苛責のうちにありて、その眼を擧げゝれば、遙にアブラハムとその懷にラザロとを覩る、乃ち彼は叫び出でていへり、父アブラハムよ、我を憐み、且つラザロを遣はして、その指の先を水に浸して我が舌を冷さしめよ。それは我は焰のうちに悶へつゝあればなり。然るに、アブラハムいへり。兒よ。汝は生ける間、汝の善き物を盡く受けたれど、ラザロは、等きに惡しき物を「受けたる」ことを憶ひ出でよ。されば今こゝにて彼は慰められ、また汝は悶ゆるなり。且つ此等のすべての事の上に、我等と汝等との間に定め置かれたる大なる淵あれば、此處より汝等の許に渡らんと欲する者も得べからず、またそこより我等の許に越えんと欲する者も能はざるなり。かくて彼いへり、されば請ふ、父よ、我が父の家に彼を遣はさんことを。そはわれ五「人」の兄弟あれば、彼等も苛責の此の處に來らざるために、彼等に嚴に證するためなればなり。アブラハム彼に云ふ、彼等はモヨゼと豫言者等とあり、彼等よく聞くべし。然るに彼いへり、否、父アブラハムよ。されどもし死人のうちより誰か彼等の許に往きたらんには彼等は悔い改むるならん。乃ち彼いへり、彼等もしモヨゼと豫言者等とに聞かずば、たとひ死人のうちより起くる者ありとも、彼等は說き伏せられざるべし。

富める人は、死後に罪を悔いても赦されず、兄弟の爲に、ラザロを甦らせ、あの世に遣はし給へと云つても許されない。して見ると、死者の爲に救を祈つたり、死後の瞑福を願つたりする事も無效であつて、人の行狀は、此の世だけに善と惡との結着をつけておくこと、傳道は、此の世に於てのみすべきことが明にされてある。すると或人は、ペテロ前書第三章十八節乃至二十節を引いて、煉獄のあることゝ、未來に傳道のあることの證據とする。

未來の事は何んなに考へたら宜しいか

そはキリストも、汝等を神の許に連れ來り給はんために、義しき者（基督）義しからざる者に代り、一たび罪に就きて苦を受け給ひたればなり。〔是〕如何にも肉にて殺され、靈にて活かされ給へるなり。これをもて彼は往きて、獄屋にある靈にも宣教し給ひたり。彼等は曾てノアの日に、方船の備へらるゝ間、神の忍びて待ち給ひしとき、順はざりし者なり。これに入り、水を經て救はれし魂は、僅にして卽ち八〔人〕なり。その〔水〕の型なるバプテスマ＝肉の穢を除くにあらざれども、神に對する良心の要求＝は、基督の甦によりて今我等を救ふなり。

併し此の喩は、直喩（メチホール）と云つて、何は何の樣だ云ふ喩でなく、何は何だと云ふ喩であるからノアはノアでなく、ノアの時の人は、ノアの時の人でなく、基督樣の時の人であり。獄は、死後の獄でなく、基督樣のいました「此の世」の事であるのだ。

次に、基督信者一般の上につきて考へても、未來の事につきての間違がある。ホーリネスでは基督樣の再臨を、最も大きい敎とする爲に、今は基督樣は不在だ、基督樣の常臨說に魅かされては宜しくない。御再臨は、いの一番に御待ち申さねばならないと云ふ。これは、基督樣の神にていますことを冒瀆して、基督樣の人であること計りを貴ぶのである。人なることを貴びて、神なることを貴ばなければ、一つの偶像拜みとなるのだ。又彼等は、前千福年說とて、千年の福なる年の前に、基督樣が、ユダヤのエルサレムに再臨なさる、それから、世界中の各國の信者は、基督樣の現はれによりて空の上に携へ上げられて、今の肉體から、新しき肉體に甦り、エルサレムで、千年の間基督樣の御支配を受けるのだ、それだから、日本の信者も、彼等のユダヤ

人が、エルサレムへ歸ることを祈らねばならぬ。殊に日本のホーリネス、マンは、日本の軍隊の援助にもよりて、ユダヤ人の歸國して、ユダヤの國が成立つべく祈れ、これは、特別な、神よりの使命であると云ひ張つて居る、ホーリネスより分れた人達は、全世界への傳道と、更生、神癒、聖化、再臨の四重の福音を述べゞきて、監督派のホーリネスは民族運動だなど云ひて、日本人の人種のユダヤ人種であること、ユダヤ人の建國の爲、日本軍隊が之を助くること等と、空騷ぎをするのは、間違であるとしてゐる。だが再臨につきて、監督派と、其の考は異つてはゐない。

丁の教會では、未來のことにつきては、冷かであるが、戊の教會、丙の教會、乙の教會、甲の教會等は、大體同じである。甲の教會は、彼等の代表として如何なる考を持つてゐるか。天主教等の煉獄說や、死者の爲に供物を上げたり、祈つたりやはせず、死後の人の體は、肉體でなく、靈體に甦る事、其の甦るのは、死後直か、又は或時を隔てゝかは、未だ確定してゐない。又個人々々が、其の死にし時に、各時を異にして甦る事を信ずる人もある。天國も地獄も、此の世には來らないと信じてゐる。併し之は間違である、聖書は、神の國は、此の世にあれども、天國は此の世にあると云ふのでもなく、神の國は、此の世になければ天國は此の世にあると云ふのでもなく、神の國と天國とは、同じものでありとし、馬太傳は、ユダヤ向の福音であるから、天國の文字を多く用ゐてゐる。しかも、天の字は複數と云つて、天がいくつもあるやうに、ユダヤ人がつかひ習したのと同じに遺つてゐる。聖書には、天國も神の國も次の二ケ所の外は、いづれも、此の世の中に建てらるゝものとして記されてある。

未來の事は何んなに考へたら宜しいか

されば われ汝等に云はん、多くの者東や西より來り、かくて天國に於てアブラハム、またイサク、またヤコブと共に席に着くならん（マタイ傳八の十一）。汝等はアブラハムまたイサクまたヤコブ、並にすべての豫言者達の神の國に在るを眼のあたり見ながら、己自らは投げ出ださるゝときそこにて歎くことまた切齒することあるならん（ルカ傳十三の二十八）。

此の外には、次の聖句の如く、何れも現在の世に建てらるゝとしてある。即ち其の聖句の箇所は次の如し。

天國

太三の二、五の三、十九、二十。七の二十一、十三の十一、十六の十九、十八の一、二十三の十三。

神の國

太六の三十三、十二の二十三、十九の二十四、二十一の三十一、四十三。可一の十四、十五。四の十一、九の一、四十七。十の十四、十五、二十四。十二の三十四、十四の二十五、十五の四十三、路四の四十三、六の二十、七の二十八、九の二、二十七、六十二。十四の十五、十六の十六、十七の二十、二十一。十八の二十九、十九の十一、二十一の二十一、二十二の十六、十八。約三の三、五。徒一の三、十四の二十二、二十八の二十三、羅十四の十七、前哥四の二十、六の九、十。十五の五十、後帖一の五、默十二の十。

日本の「さんびか」六百首のどれも〳〵、天國も神の國も、此の世になくして、死後の世界にあることを旨として記されてある。聖書は固より、天の上の天國は說いてある。只異つた名で示してある。即ち新天新地と云ひ、

天のエルサレムと云ひ聖所とも云つてあるが、此等の名で示されてるのは、此の世にはないのだ。地の上の天國も、天の上の天國も、其の中味は違つてはゐない、只常の生命の續いてゐるので、生命の河の此の岸と彼の岸との違ふのみである。蛇がぬけ殼はぬけても、蛇の中身はいつも同じである樣なものである。主イエスが天國を地上のものとして、明にお敎になつた處は、パリサイの人に對して、天國は何處にあるかとの問に答へ給ひし處には。

天國は汝等の間にあり。

と仰せられた。卽ちパリサイ人達は、天國ではないが、パリサイ人達の中に天國がある、卽ち我は「天國だ」と仰つたのだ。默示錄に、「聖所は羔なれば なり」との御言と合せて考ふると、羔とは、基督樣であるから、聖所は基督樣であると云ふのだ。だから、聖所卽ち天國は基督樣で、基督樣は天國であるのだ。して見れば、地の上の天國は、基督樣と基督樣にありて、淸められた基督信者とによりて成立つてゐるのだ。罪なき生命を持つ者は天國であり、神の國なりだ。又基督樣は、次のやうに、

またサタナ若しサタナを逐ひ出さば、彼は己自らに逆らひて分れ爭へるなり。されば如何にしてその國立つべけんや、われもしベルゼブルもて惡魔を逐ひ出さば、汝等の子等は誰にて逐ひ出だすや。此のゆへに彼等は汝等の裁き人たるべし（マタイ傳十二の二十六、二十七）。

と仰つてから、

されど我もし神の國にて惡魔を逐ひ出ださば、そのとき、神の國は汝等に到れるなり（マタイ傳十二の二十八）。

と仰つた。神の國は、「そのとき」卽ち過ぎこし方に在つたのだ。之と共に地

獄は卽ちサタナ及悔改めない惡人によりて、地の上に在るのは、固より本當の事である。

殊に日本のクリスチヤンは、人の死の時、告別と云ふが、旣に瞑つた人に話は出來ないのに、別を告ぐるは道理に叶はない。又「召さるゝ」と云ふが、「召さるゝ」とは、聖書（ロマ書九の三十）には、道を求むる時の外に、人の死ぬるときなどに、「召さるゝ」と一度も使はれてゐない。又「永眠」と云ふが、之はトンダ大間違だ、こんな句は、聖書に一ケ所もない、かぎりなく眠つたら、犬や猫やと同じく、生命は死の其の時限なくなつたと云ふ事になる。聖書の「瞑」と云ふ言葉は、起きて（甦る）時に對してある語である。今の世に瞑つて、新しき世に復生る卽ち起きるのだ。「昇天」と云ふのは、基督樣めかして恐多い言葉だ、就眠と云ふも、入眠と云ふも、何となく繭になる蠶の樣で宜しくない。我等は聖書の瞑を「就瞑」又は「入瞑」と云つてゐる。古語に「以て地下に瞑すべし」ともあるから、一番よい言葉だと思ふ。

日本基督其の他では、ホーリネスと異りて後千福年、千年王國、卽ち基督樣の千年の御代の後に、主イエスの再臨のある事を信ずる。かくて、基督樣の善人と惡人との審判、惡人への地獄、善人への天國が定らるゝと信ずる。

下

我等の同志は、未來につきて、如何に信ずるか、次に五つ六つのことを語つてみやう。

（一）此の世のある限りで、未來は、ないかと云ふに、それはある。アメリカのゼームスと云ふ學者は、人の靈魂は、次の三つに考へらるゝ（イ）「進化論」では云ふ、物は、小さい生き物から、だん〳〵大い生き物に變つてきて、

木から、けもの、けものから、人間となつた、併し世の生物は人間で止つた、卽ち人が死ぬれば人は無なつてしまふと。人の靈魂は、別の生き物から生れたのだから、生命が絶えればなくなつてしまうのだ。是を產出說と云ふ。

（ロ）人の靈魂は、鐵砲の中に込められた彈のやうなもので、生物が進んでくると、急に靈魂が飛出すのだ、卽ち突然に飛出して、變出して來て、靈魂が現はれるのだとする、だから又突然に消えてもしまうのだとする。（ハ）遞傳說と云つて、電氣が瀧の水を通過つて、世間に光や力やを送り出す樣に、世間にある靈魂が人間の身體に這入つて來る。瀧は電氣でない樣に、人間の身體は、靈魂でなく、靈魂は外から這入つてくるのだ。では、其の靈魂は、何處から來るか。曰く宇宙感動から來る。今迄世間の記錄になかつた偉い人、聖い人が、外から這入つてくるのは、宇宙感動だ。では、その宇宙感動は、何であるか、物質の中の電子か、又は靈的生命か、それは、佛道の悟りのもとである、凡は神なりと云ふ神からか、基督道の悟りの、否、基督樣にあつての證による唯一つの神、語を換へて云へば、前に云つた顯人神にありての創造によるのかは、ゼームスが話さなかつた。

私共は、此のゼームスの話の樣に河にも此の岸あり、彼の岸あり、燕が去れば雁來り、雁去れば燕來るあり、人にも此の世あり、又他の世あるは、當然であり、又必らずや、唯一の神の上なき力によりて創造られし靈魂が、人の肉體の中に宿り、恰も身體が衣を着る如く、靈魂が、身體と云ふ衣を着、又此の肉體の衣を脫げば、更に靈體の衣を着るのである。是は餘りにも當然のことゝ思はる。

併し、此の事につきては、確かな證據が欲いと云はゞ、我等は、人の證據

よりも、神の證據が信ぜらるゝのだが、神の證據を必要とする。之には、基督樣が、次のやうに仰つてある。

我はアブラハムの神またイサクの神、またヤコブの神なり。神は死人の神におはさず、されど生ける者の〔神におはします〕（マタイ傳二十二の三十一）。

アブラハムも死後生きてゐる、イサクも、死後生きて居る、ヤコブも死後生きてゐる。とは、主の御意見だ。「神は死せるものゝ神に非ず、生ける者の神なり」とは、その證據になる御言だ、此の御言葉の前に、次の樣に仰つた。

然るにイエス答へて彼等に曰へり、汝等は聖書をも、また神の力をも知らざれば謬れり。そは甦に於ては娶らず、また嫁がず、されど彼等は天にある神の使等の如くにあればなり、（マタイ傳二十二の三十）。

此の頃、日本人は、三原山とか、大磯海岸とかへ行つて、自殺する。殊に男女の心中が多い、未來のことの履き違から、此の世では、姦淫罪を犯してから、天國で意に叶つた生活をしやう抔と、遺言するものが多くある。十誡の第六誡の「殺す勿れ」を犯しつゝ、自殺をして卽ち大罪を犯してから、天國に行かれるものではない。のみならず主の御教によれば、死後の世には、戀もなければ、夫婦の交もないとあるのだ。世の年若き人々が情の炎に燃えて、無分別な事をして、戀愛第一と云ふのだが、それは大間違だ、人間は、戀愛よりもまだ外に大切なことがある、神の御榮を顯はし、主イエスの爲に學問したり、世間の業をつとむべきである。

（二）永久の生命と常恒の生命との別のあること、一般の人は、間違つて、「かぎりなき生命」「永遠の生命」と云つてゐる。それは、惡魔にもある生命であるが、基督樣に救はれた生命は、常恒の生命と云ふのだ。喩へて見れば、

昔、徳川時代には、拷問の刑があつたが、それは、時々にあつて始終ではない、基督様にありての賞も罰も永久でなく常恒である。マタイ傳二十五章四十六節に、其の間のなくつゞく事は、次の如く記されてある。

かくて此等の者は常の刑罰に去り往き、また義しき者は、常の生に往かん。

此の常恒の生命も、常恒の刑罰も何れもグリークの原語では「アイオノン」とありて、「いつも〳〵」と云ふのである、賞罰共に、「いつも、〳〵」であるのだ。

(三) 前に云つた様に、我等は、地の上の天國と天の上の天國とを信ずるのである。又天國を生命の邦（マタイ十八の八、九、十）とも云ふのである。

一　人の悟りに　燕にも行く
　里のありつゝ　人達に行く
　邦のありとは　保たるゝ哉

折返

あまたの神は　爭おこし
ひとりの神こそ　やはらぎ來し
生命を四方の　海に滿せれ

二　されども神の　悟のなくば
　ときはの生命　もつ人々の
　神はひとつと　如何でか悟る

三　末を末とし　元を宗とし
　再び來ます　彼人よりも
　天を降らぬ　エスをたのめや

四　永き生命の　よしつゞくとも

未來の事は何んなに考へたら宜しいか

ときはの生命　つゞかざりせば
神のみくには　夢にひとしも
五　さばきの主に　ときはの詛
必ずありて　救のぬしに
生命の滿てる　清こそあれ
六　我は永きか　又はときはか
サタナに永き　いのちありけり
今もときはの　いのちはあらず

（四）昇天後の基督様を、「神の右に坐し給ふ」と云ふが、是は、神に右とか、左とかある譯ではないから、是は、人間のことを以て譬へたのだから、直に云へば、基督様は、神專門になつたと云ふのだ。昇天前迄は顯人神と云ふのなら、昇天後からは、再觀念で神を見ることになるのだ。基督様の方では、顯人神その儘であらせられるのである。默示錄四章一乃至十一には。神の姿はなくて、長老達計りで、神の祭壇に向つて禮拜をしてゐるが、次の本文を能く讀んで御覽なさい。

此等の事の後にわれ見しに、見よ、戸は天に於て開かれたり、且つ我が聞きし初の聲は、喇叭の〔響の〕如く我に話たりて、云ひけるは、此處に登れ。されば われ汝に此等の事の後に、必ず發らざるべからざる事を見はさん。直に我は靈のうちにありき。かくて見よ、位は天に据ゑられたり、且つその位の上に坐しておはしき。また坐し給ふ者、幻には恰も碧玉また赤瑪瑙の似くにおはしき、またその位の圍に、幻には恰も綠玉にて成れる似き虹〔ありき〕また此の位の圍に二十有四の位〔ありて〕その位の上に、

白き衣を纏ひたる二十有四の長老等の坐するを見たり。また彼等はその頭に金の冠ありき。また此の位より電と雷と聲と出て往き、また七つの火の燈火、その位の面前に燃ゆ、是れ神の七つの靈なり。また此の位の面前に恰も水晶の似き、玻璃の海〔の如きもの〕〔あり〕。またその位の眞中と位の圍には、前にも後ろにも、數々の眼にて滿ちたる、四つの生き物〔あり〕。卽ち第一の生き物は恰も獅子の似く、また第二の生き物は恰も牛の似く、また第三の生き物は人の如き顏をもてり、また第四の生き物は恰も翔る鷲の似し、また〔此等の〕四つの生き物、その一つ一つに六つの翼ありて、〔その翼の〕外も內も、數々の眼にて滿てり、また彼等は日も夜も休むことなく、云ふ、聖なる聖なる聖なる主全能の神、おはしゝ者、またおはす者、また來ます者、またかの生き物と、榮光と敬と感謝とを、位に坐し給ふ、世々の世々に至るまで生き給ふ者に歸しまつれるとき、かの二十有四の長老等、位に坐し給ふ者の面前に伏し、世々の世世に至る迄生き給ふ者に平伏し、且つ己が冠を位の面前に投げて、云ひけるは、主よ、汝は榮光と敬と力とを受くるに値し給ふ。そは汝はすべての物を創造り給ひ、且つ此等は汝の意のゆゑに存し、また創造せられたればなり。

(五) 千年の王國の事に就きては、次の聖句を御讀み下さい。

また我その手に奈落の鍵と大なる鏈とを持ちて、天より降る一〔人〕の天使を見たり。かくて彼はかの龍、卽ち惡魔にしてサタナなる古き蛇を捉へて千年〔の間〕これを繫ぎ、またこれを奈落に投げ入れたりかくてこれを鍵し且つもはや國人等を惑はすことのなきやう、千年の終るまでその上に封印せり。されど此等の事の後、彼は必ず少時、釋かれざるべからず。また

われ多くの位を見しに、その上に坐したり。かくて彼等に裁を與へられたり。またイエスの證のゆゑに卽ち神の言のゆゑに馘られたる人々とかの獸をも、またその像をも拜せず、またその額の上に、またその手の上に、徽を受けざりし人々との魂を〔見たり〕。かくて彼等は生きて千年〔の間〕キリストと共に王たりき。されどその餘の死人たちは千年の終まで生きかへらず。是れ第一の甦なり。福なる者また淸なる者は、第一の甦のうちに分を有つ者なり。第二の死は此等の者の上に權を保たず、されど彼等は神の、卽ちキリストの祭司たらん、かくて彼等は彼と共に千年〔の間〕王たるべし。

また千年の終りたるとき、かのサタナはその檻より釋かるべし。乃ち彼は地の四隅に〔ある〕國人、ゴグとマゴグとを惑はし、彼等を軍のために集めんとて出で來らん、その數は海の沙の如し。かくて彼等の上り往きて、地の幅を蔽ひ、また聖徒等の陣營、卽ち愛せられたる市を圍めり。しかるに火は神より、天より降り來りて彼等を甜め盡せり。また彼等を惑はしたる惡魔は、かの獸も贋豫言者も〔居る〕處なる、火卽ち硫黃の池に投げ入れられたり。かくて彼等は世々の世々に至るまで、日も夜も苛責せらるべし。

（點示錄二十の一乃至十）。

（六）基督樣の續顯人神。一般には、主イエスの御再臨と云ふが、我等は、之を續顯人神と云ふ。基督樣の方からは、ユダヤに御現れになつた儘であらせらるゝから、顯人神の續であるが、我等には、主イエスの昇天より、世の終りの御再臨迄、それから續いての御審判迄（マタイ二十五章三十一節乃至四十二節）は、觀念だけで主イエスを仰ぎまつつてゐるから、卽ち、我等の肉の世の生活で妨げられて、主イエスの靈體を見ることが出來ない。それであるのを、

御再臨の時には、再び顯人神としての主イエスを靈體となつた我等は仰ぎ見らるゝ、だから、前の顯人神としての主イエスを、續顯人神として仰ぎ奉るのである。此の事を「雲に乘り來り給ふ」とあるが、之も人間の事を以て考へたので、主イエスは、人として我等に交り給ふことを云ふのだから、今我等が肉の眼で見る空の「雲」ではないと思ふべきである。

（七）天國及地獄の喩。

御審判後に、基督樣を信仰せぬ人たちの入れらるゝ「硫黄の火の池」と云つても、外の喩と同じく、人間の事を以て、人の生命が、いつも〳〵の刑罰を受けて限りなき苦を受くるを云ふのだ。新郎卽ち基督樣を迎ふる新婦（基督信者）を喩へた六百里もの高さと長さと幅とのある美はしい宮（默示錄二十一の九節乃至二十七節）も、之は人間の事を以ての喩と思ないと迷信となるのだ。

この新婦の喩は、終の方になると天國の喩にもなつてゐるが、基督樣は、天國であり、天國は又仲間であり、所である樣に、基督者は新婦であり、又天國であり、天國の仲間である。我等は、今の肉の世に於ては、所と云ふ思を離れないが、夢の世にて、所も肉もない樣に、時間にも場所にも離れるのかも知れない。默示錄に於ての「所」も喩と思へば宜しい、「所」と云ふ考に捕へられない樣にすべきである。「所」と云ふ考に捕へられると、色々の迷信に捕へられて、天國は、此の世の樣に、美しき山水の景色のある所だ抔と云ふ樣になるのだ。

昭和十一年六月十日印刷
昭和十一年六月十五日發行

定價 金貳拾錢
送料 金四錢

著者 尾島眞治
東京市澁谷區松濤町卅七番地
發行者 尾島眞治
東京市京橋區小田原町二丁目四番地
印刷者 西崎虎次郎
東京市京橋區小田原町二丁目四番地
印刷所 日章舍

不許複製

發行所
東京市澁谷區松濤町卅七番地
信賴舍
振替東京八四四二六番

永井直治譯

新契約聖書

定價五拾錢
送料金八錢

新契約聖書 **馬太傳譯語解**

永井直治著

定價壹圓貳拾錢
送料金八錢

新契約聖書 **路加傳譯語解**

永井直治著

定價八拾錢
送料金六錢

何れも基督傳の要所の正しき理解を明かにせるのみならず、また基督信仰の誤なき指針なりと信じます。

發行所 東京市淺草區淺草橋三丁目十ノ七 **挺身舍**

振替口座東京六八一〇七番

繪による傳道

今井よね編輯

Ⅰ期刊行 **聖書物語**

全卷十二冊 刊行濟み內八冊 賣切絕版
四冊 四圓 送料市內六錢 地方三十八錢

Ⅱ期刊行 **イエス傳**

全卷十二冊 既刊十一冊 續刊一卷
全卷申込 十二圓 送料 本會負擔

Ⅲ期刊行 日本 **信仰英雄物語**

全卷十二冊 既刊四冊 續刊八冊
全卷十二冊申込 十二圓 既刊四冊四圓
送料ハ聖書物語ニ同ジ

用途 日曜學校教材に、幼稚園に於ける宗教々育資料に、各基督者家庭のお話材料に永く保存出來る此の畫集を、是非一揃御用意置き下さい。

發行所 東京市本所區堅川一ノ四 **紙芝居刊行會** 振替東京二六一三番

信賴舍刊行

尾島眞治著

生命中心の基督道（二版）	定價	金四十錢
	送料	金四錢
基佛論戰（二版）	定價	金二十五錢
	送料	金四錢
神社正解（五版）	定價	金十五錢
	送料	金二錢
續神社正解（三版）	定價	金十五錢
	送料	金二錢
續々神社正解（二版）	定價	金三十錢
	送料	金二錢
神社正解補遺（二版）	定價	金二十五錢
	送料	金二錢
神社正解第二補遺	定價	金五十錢
	送料	金二錢
さんびか集	定價	金壹圓
	送料	金六錢
基督道對照	定價	金壹圓
	送料	金六錢
舊神學の沒落 新創造の神學	定價	金一圓八十錢
	送料	金八錢

東京市澁谷區松濤町三十七番地 • 振替口座八四四二六番

終